



デクエンダー!

ミラクルズ!
MIRACLES!
NEVER GIVE UP, GO AHEAD, AND DO...
ながたかずさ

Miracles! Episode 3

- ディフェンダー！ -

ヒロイン
本日の主演

神経質さうといけど
オヤシてカシイ委員長。
クレーンなスピードDF。

2ND

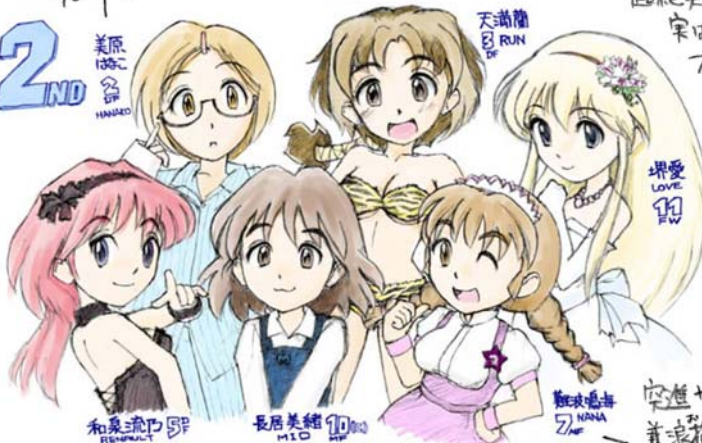
美原
はるか
HARUKA

天真爛漫食いはかな
ナチャル・ガール。
超攻撃的バウフルバロ。

天道
蘭
LAN

無口ながら
存在感ありの
超絶美少女。
実はお茶目。
フィジカル系
バロ-FW。

増愛
LOVE
LOVE



和泉流
セウ
SEIKA

長居美穂
MITSUNE

花壇
HANA

セース振替群
切られ振替群
あんたかんだい いちこもズク
ズイイ奴。先達サイドアタッカー。

強く優しく頼もすぎる。
我らが黒姫。
パーフェクトボランチ、キャプテン。

空壇サッカー根
美浪花主婦。
盛り上げエキな
テクニカル司令塔。

- ラズル だいり
・ 上野大地 (2年) ... サッカー戦術と乙女心掌握の天才。2-4 (監督)。
- からぼり さとる
・ 空壇三十六 (2年) ... 軽い足腰と無駄に豊富なアイデア。
4-6、プロトローガー。

登場人物
ご紹介

- 三ツがわ たくみ
・ 馬川 匠 (2年) ... 腕は確かな後援カメラマン。
- せしやし てつや
・ 千林 哲哉 (2年) ... 援団副団にしてサポリダー。
- たかやま かずひろ
・ 高安 和輝 (2年) ... 放送部。テニショ高の実況者有名。

日曜ハフの元フィギュア
スケーター。物腰柔らか。
微笑みと絶やさぬ。
中盤の動き。ハニービー

ボーイッシュ＆元気一番。
ムードメーカー。
FW兼任の超反応GK。

天下無敵のボク倒せおせうさま。
敵も味方も大混乱。
生息が右サイドバック。

1ST 8M

平野
エレナ
ELENA
8M

吹田千里 

2014年12月

西九条
明日葉
157

17

佳吉古都 12
COTTON

156 LRP 03
COTTON *merino*

天王寺ありす 21冊
A1.355

ALICE

此花可憐 9/FW
KALLEN

KALLEN 2/FW

見た目派手でも
線の下の力持ち。
気配り大好き
マネージャー。

① 一見ニコバーバ、
実は底の知れない
モオ少女。
ファンタジスタ。

ト単純だけどそこが
 カワイイなところ。
 ユース代表の逸材。
 エース・ストライカー。

時にカザアル時に武人、
 愛に見え目に騙されては
 いたない。
 不屈の守護神。

日系4世ブラジリアン。
誰にも止められないダンジリサウダダ。
トリッキーウイング。

忍字
SHINOBU
15K

守口忍
SHINOBU
16K

マキ.
1993.
キシタ
MAKI.PH
19/FH

19X3.
キワダ
MAKLEP
19FH

3RD

森之宮胡桃 403F

林之吉明和子 588

1尾由美子 YUMMY 

YUMMY ZING

梅田毛④

梅田毛色

クルで捉えどこのない、
どと時に何考えてない
ネコ娘。
高次元戦闘爆撃
ハンターFW。

努力家の頼み人姉貴。
ガツと肝っ玉は
天下一品!
ME/DF 自働職人。

B3桁のダイマイトボデーで
バイクを荒く回す食神。
フェアレディ-DFII-ター。

★あらすじ？

「ミラクルズ」はとある街の女子サッカークラブチーム。
ただいまは冬の日本一を決めるオープン大会
「クイーンズカップ」めざし、にぎやかに奮闘中。
今回はいつもパワフル頑丈健康頼れる碧、
蘭ちゃんが主役の模様。
いよいよ大詰め、地方予選の行方も気になります。
はてさて、どんな騒動が巻き起こりますことやら……

★もくじ！

- 敗戦
- シュート練習
- 嘆き
- 秘密会議
- 再起動
- 父帰る
- 熟成肉
- レスキュー
- スイッチ
- 声援
- 2ストップ作戦
- 「またか」
- ディフェンダー
- 宴

■敗戦

あーっ……

声にならない悲鳴がスタジアムに木霊する。

『負けるのか』

見慣れない風景を想像することを拒否するように、ある者は選手を睨みある者は絶叫を繰り返して心を麻痺させる。

ベンチもしかり。

座る者はおらず、全員が立ち上がって険しい顔で声を囁らしていた。

敵は、気持ちは逆、行動は同じ。あと数センチ先にある勝利をもぎ取らんと精一杯一杯、のばす。

どちら向きにせよアドレナリンの奔流の中にあるスタジアムの中で、独り。

上町大地だけが、ヤケに……自分でもおかしいと思うほど……クールだった。

『……このまま負ければいいのに』

さつきから抑えきれない頻度でその考えが浮かんでは、それはさすがにマズからうと自分で打ち消すのに忙しい。

理由はある。

負ける理由——それは裏返せば勝つ理由、がうすぼんやり、本当に薄らボンヤリとだが、見えかけて……感じられかけて、いる。

負けが確定すれば、それが、すこしは、ハッキリしそうだ。

己の欲求、それも知的好奇心のような火急を要さないそのために、チームとサポーターの巨大な歓喜を犠牲にする。言うまでもないが倫理的にも常識的にも、異常な精神状態だ。

しかし……おそらく、アーティストというのは、こういうもの、だろう。

ピッ、ピッ、ピーーーーーッ……

笛が鳴った。負けた。

崩折れる選手たち、リザーブのメンツ。千里など文字通り芝を転げまわって悔し

さを表している。ため息とも悲鳴とも付かない唸りが大地の背後で渦を巻く。

見えたか。

いや、まだだ。

ただ……モヤモヤとしたものが、残った。これを……言葉に、そして行動にせねばならない。

どんな絶体絶命のピンチでも「やるべきこと」があれば、人間は、強い。

後年キャプテンはよく言った。

「何が凄いつてあの時の大地君、笑ってたのよ、それも不敵に。

あれ見てね、『あ、この人やっぱり変な人だ』と思つた」
「だがしかし。

「……でも、それで我に返つたの。

終わつたわけじゃない、つて」

それを見たキャプテンは、踵を返すと同じ笑い（らしきもの）を作（ろうと努力し）て、へたり込むみんなを引き起こしに歩きはじめた。

そう、まだ終わったわけではない。

■シュート練習

——時は遡る。

年に一度の女子サッカークラブ日本一を決めるトーナメント・カップ戦、『クインズカップ』の地方予選はいよいよ大詰めである。

我らが『ミラクルズ』はユース代表二人を中心とした攻撃の破壊力と、キモを押さえた「ザルはザルだが点はそれほど入らない」守備で、順調……でもない、ドラマティックに勝ち進んだ。

ある試合は途中投入のエース可憐が文字通り火を噴くシュートを乱打して敵のGKを病院送りにし、ある試合はGK忍がドリブルで得点、ある試合はこれもまた途中で入れたDFはなこが試合を決める大暴れ、さらには美形のFW愛が女優もかくやの華麗な舞台を見せつける……とにかく、「何事かが起きる」。ので、元々多かつたサポーターはいや増す。

次の試合、地区トーナメント準決勝、これを勝てば地区代表枠三に入ることが決定するつまり、本戦に出場が決まる。もちろん負けても三位決定戦で勝てば目的は達成されるわけだが、こういうものは一発で決めたいもの。

さらに前年ミラクルズはこの地区トーナメントを優勝して全国本戦に出場している。かつ奇しくも、相手は前年決勝で破ったチームだった。ということ、ある程度勝手知ったる相手に対し、自軍は去年よりはるかに戦闘力がアップしている。今年も勝てるチャンスは、十分にある。

……こういう浮ついた条件の時に、事故は起きやすい。

上町大地は年齢こそ高校二年生だが、勝負の修羅場をくぐった経験なら同世代はおろかヘタな大人など比較にもならない。「嫌な予感」は織り込み済み、「なかよし」と「スマイル」は確かにいいことなのだが緩みがちなチームの引き締めに力を注……いでも、緩む。

まあそれが、ミラクルズというチームであり、それがいいようにも、悪いようにも、作用する。

『……しかしそれにしても……』

ゆるい』

本日の練習も終盤。大地の見つめる先では、ワイワイ言いながら笑う選手たちが、シュート練習の組決めをしていた。

シュート練習にもいろいろあるが、今日のは

- ・ボールの出し役がハーフウェーあたりからゴール方面へ短いパスを出し
- ・そのボールを、出し役の更に後方から二人が左右から追う
- ・先にボールを奪った方がシュートする

というもの。単純にダッシュするよりボールを追う、それも競い合う時の方がスピードが出るもので、それによつて能力を引き出すことと、相方という邪魔者を物とせずシュートを撃つ、その訓練ができる。

そうは言つても相方とスピード差がありすぎると勝負にならないので、適当に「コイツと勝負したい」相手を選ぶわけである。

「エレーナア、やるう？」

「ハイ！ 流乃姉様！」

「コレコレ、流乃先輩だと絶対勝つに決まってるじゃないですか。アタシとやりましょうって」

「勝って気分よく試合に臨みたいじゃない？ カレ相手だと全力出さないと負けるのよ」

「全力でやらんかい！」

わはははは……

ニコニコ笑っているエレーナはかなり速いあまり無茶なことをしないのでポール奪取時に付け入る隙があつて、人気者だ。

「エレちゃん、じゃあ、今日もボクと！」

「ハイ！ 蘭姉様！」

「観てみい流乃、負けても負けても挑む蘭のチャレンジング・スピリッツを」

「ムダなエネルギーは使いませーん」

「サイドバックはムダが命！」

「いつでも代わったげるわよ」

蘭は身体能力は抜群でダッシュもスピードもある。ただ足元が割と不如意で、モタモタしているうちにボールを奪われたりする。エレーナには、勝ったことがない。

「……今日はウチもやつときたいなあ」

「じゃあ、私と交代でパサーやつて」

「いや、やるならキャプテンとがええかな、と」

「お。いいね。じゃあ誰か」

「……僕が出すよ」

「「おーっ」」

ナナと美緒の話に、大地が割って入った。この手の練習でも「出し役も練習」とあまり手いや足を出さない大地には珍しい。

ちよつと、間近というか、「入り込んで」みたくなった。

実際すこしだけ、引き締まる。

準備が整う。G Kは二人、忍と千里が交代で務める。

「……こつとん、ホイッスルお願い」

「あ、はい！ ……いいですかー」

最初の組は先程の可憐と流乃。裏を取るスピードなら日本屈指と言ってもいい天才F Wと、「光速」サイドアタッカーと自他共に認める走り屋との対決、のっけからメインデイツシュ。

ピッ！

……ぼー……

意表を突く。

ハーフロビングのような軽く浮いた球が、かなりの速度でゴールへ向かう。

ダッ

流乃と可憐が狂ったようにそれを追う。みるみる距離を詰め、先にたどり着いたのはわずかに左から走った流乃だが、左脚、シュートモーションに入ったところで

ガッ

別の左足がハーフヴォレーで獲物を奪った。そのままサイドネットに突き刺さる。忍様を持つてしても反応遅れ、もちろん届かない。

「アオ!!」

悔しさに呼気を吐き出す流乃に、仕留めたばかりの獲物を口に咥えた狐のような、まったく平板な表情の可憐。

「お見事!」

思わず大地も手を一拍。

なんだ、なんだかんだいつて、やるのはやるんだな。

「もつぱつ!!」

「いいですよ」

二人が列の最後尾に並んだ。

いい勝負に刺激されたか、それぞれが本気で鏖迫り合いを繰り広げて、白熱する。とびきり遅いものには、組んだ胡桃がいつもは数歩後ろから走るハンデを出す、大地はそれを制して並ばせて、いきなり高いフライを上げた。これなら落下点に入るのはどちらでも間に合う。空戦には抜群に強いセクターFW胡桃だったが、油断した。ジャンプの瞬間もものに抱きつかれて態勢を崩し、転がるボールをもに蹴られる。（ちなみに千里に悠々捕られる）

「……反則。」

「のーのー、いつつ・まい・しゅー」

「反・則！」

「もいつかいもいつかい！」

注目のキャプテン対ナナなど、擦り合いがペナルティエリア付近まで続いて、まるでハリウッド映画のカー・チェイス。練習の趣旨が変わっていた。二人が同時に蹴ったとおぼしきボールは、二倍の威力を得てGKを吹き飛ば……すわけはなく、

二つの力が入力されたことによって予測不能な軌道を描……きもせず、あきつての方向へ宇宙開発となった。

主将と司令塔がゲラゲラ笑われて引き下がるわけにはいかない。また、列に並ぶ。

「うう……勝てないなあ……」

「ふふつ、ドンマイです、姉様」

「手加減は、無しだよ！」

「もちろんデス！」

蘭とエレーナは、エレーナが勝ち続ける。

蘭はどうしても動作区切りでワントンプ挙動が遅れる。姿勢を整えるような「タメ」を持つてしまう。

大袈裟に言えば、アメリカン・アニメのような動き。

そこでやられる。

以前から指摘されてる悪い癖だった。特にこういう、「これをしなければ」という時によく出る。逆に難しいクリアや敵とガツガツ競ってる時の方が、スムーズに身体が動くほどだ。

パワーと筋力がありすぎるが故にそれを使いこなせてないという見方もあるが、そうでもない時もあるので……

大地もこれは直せば直したかったが、大事なところではさほど目立たないのと、直すと言っても方法論がわからない。蘭のような身体で覚えるタイプは、身体的な癖を矯正して元々もってるいいものを失うのも怖い。

ほんのわずかな身体の動かし方。

○・○何秒の「ちがい」。

それでもう、勝負が決まる。おそらく単純な駆けっこなら負けないのに……

『……もつたいないなあ……』

蘭の漲るパワーは誰もが知っている。一度野球をやった時など金属バットながら柵越えをバツコンバツコン連発し、男子野球部に強奪されないか不安を覚えたほどだ。

もちろん、本職ディフェンダーとして対人対一には絶対の自信と信頼がある。しかしその力、「守り」だけではなく「攻め」にも使いたい。それは贅沢だろう

か、強欲だろうか。

ハーフウェーからでもゴールを直接狙えるロングシュート、蘭なら夢物語でも偶然でもない。

『……いやまあしかしそれはおいおい。いまは、できることを一〇〇%』

大地もすこし、気持ちがちんまりしていた。

——練習が終わる。

結局、蘭は一度も勝てなかった。しかし彼女は前を向く。

チャレンジは、失敗しても「チャレンジだから」と立派な言い訳ができる。なのに人は、チャレンジしたがない。

なぜだろう。

「……さあて、次の試合では誰を肩車するかなー！」

彼女は試合終了後、本日のWOM（ウーマン・オブ・ザ・マッチ）らしき選手を

肩車してサポーターにお披露目する役、を、いつの頃から担っていた。担がれる方にもサポーターにも好評で、試合終わりのきもちいい時間を、さらに豊かにしていた。もちろん、勝てば、の話であるが。

「賭けよか。」

ウチはウチ！」

「おつ、いー賭けですなー。じゃアタシもアタシ！」

「こういうところがプロは積極的なのよね。あたしはあーちゃんかな」
「私は、ここはやっぱり、キャプテンだと思いマス！」

わいのわいの。

「蘭先輩そんなこと言っていないで、たまには担がれてくださいよ」

「ハハッ、ボクは無理だよ。」

第一重いし」

「大丈夫！　しのとユミとくーとマキが騎馬を作るから、それに乗ればいいの！」

「ももは何してるの」

「騎馬と一緒に乗って旗を振る」

「キバはともかくそれはキャツカ」

「なんでー？　蘭ちゃんがWOMだったら、横にいる私も必然的に大活躍でしょう？」

「そんな必然ねー！」

「そもそも旗てなんだ、大漁旗か」

「とにかくみんなで担ごうー」

「おー!!」

「あははっ、いいよいいよ」

『……まあ浮ついてるが元氣だし、いいか』

見ながら大地は心の中で肩をすくめた。

リラックス、力を出しきるのに、とてもだいじなこと。

「……それでは！

予選突破を祈願して！

円陣!!」

「「はい!!」」

「……今日は音頭は全員で！
いくよっ！　せー・の！」

「「Never Give Up!」」

「「Go Ahead!」」

「「And DO...」」

「「MIRACLES!」」

あー！とかヨッシャー！とか、思い思いの声が余韻に響いた。

「今日も一日、ありがとうございました！」

「「ありがとうございました!!」」

ロッカーへ歩を進めると、玄関方面から空堀三十六が顔を出す。

「……おう、いまあがり？」

「はい！ 空Pは偵察ですか？」

「や、祝勝会の準備」

わーっ……

「勝ってくださいよ、豪勢なの準備したんで！ パーティできませんいうたら洒落
になりません！」

「もちろん！」

「ホンマたのんます！」

……へへへ、美味しいもの用意しますよってん、がんばってくださいな」

「はい！」

三十六は、チームプロデューサーというカッコイイ役職名の雑用係である。大地
を見つけて、こっそり囁く。

「……相手さんかなりマジやで。フェンスにへばりついてたら追い払われた」
「そのカッコ？」

「いや、着替えた」

「カメラとかは？」

「もちろんバレるような動きはしてません」

「ふむ。」

「サンキュ、いつも汚れ役悪いね」

「いーえー。」

まあ仮にも同じ前年ブロック代表やからな。一筋縄ではいきませんわ。丁半博打で当然」

「……三十六がそう言ってくれと、わりと助かる」

「みんなどう？」

「話題にもしないね」

「一番よくないなそれがな」

「目を逸らしてる、つてことだからね……」

ぽん。

三十六が大地の肩に手を置く。

「まあ、気楽に。」

「終わるわけやなし」

「ん。」

「そこがね、良くないんだよ」

「そうやねえ……」

「美味しいもの、つてなに？」

「大ちゃんにも内緒」

「ははっ。楽しみにしてる」

「俺が一番楽しみなぐらい」

データは組み合わせが決まって即取りに行った。今日は確認に行ったわけだが、
ビリビリしてるという。

ビリビリすればいいというものではないが、しなさすぎるのも不自然だ。

『……まあ、できるだけのことをしましょう』

胸の中に充満する嫌な色のガスを吐き出すように、一息吐いた。
キャプテンが、それを見ていた。

■嘆き

試合経過は予想通りになる。

守る相手チーム、攻めるミラクルズ。

相手もこちらのことをよくわかつていたし、こちらも想定内の戦いだった。

ミラクルズは言わば、「全盛期のルーニーとベツカムが居るプレミア昇格したてのチーム」のようなイメージである。

守備も組織もさほどではないが、ツボにハマると怖い攻撃のタレントが居る。

こういうチームを相手にする場合、真正面から力押しでいける相当な強豪を別にすれば、対策は二つある。

そのタレントを潰すか、オープンな殴り合いに持ち込んで殴り勝つ、か。今まで
の相手もおおよそどちらかの手段を取った。

今回は前者、というよりもミラクルズそのものを潰す、という戦略だった。
攻撃のキツカケを、与えない。

具体的には可憐とナナにマーカーをつけ、ボールホルダーに遮二無二気味にプレスを掛ける。半ば攻めや組立は諦めて、専守防衛に徹していた。

ブロック代表ほどのチームが守りを固めると、そう簡単に点は入らない。それでも、そういうハイプレス作戦は後半足が切れてくるのがお約束なので、ミラクルズはじつくり構えた。

しかし彼女たちは、根性があった。

時間が経つても経つても一歩前へ踏み込み相手の自由を奪う気迫は衰えず、ナナと可憐はチームから隔離されてなにもできず、こういう場合ありすが切り込めればいいのだが今日は出来がイマイチ。時折、流乃が遠目から胡桃の頭めがけて放り込むが相手DFが文字通り泣きながらのしかかっていた。まるであの練習のもののように。美緒かエレナが突出してミドルを撃つも、GK気迫の堅守に阻まれ、またカウンターも怖いのでおいそれと前目に陣取るものはばかられる……

スコアレスのまま、時間はいつしか後半残り五分。「延長」という言葉が頭をよぎる。

その時事件は起きた。

ミラクルズ陣前コーナークック、相手長身FWと競り合った蘭が、着地の際足首を踏まれて倒れた。無論故意ではない。真摯に謝る相手に、「平気」と立ち上がるうとして膝が折れた。

頑健そのものを絵に描いたような蘭の、いつにない姿を見て大地は慌てて担架を要請する。マネージャーの古都を走らせる。担架に乗せられて蘭が出る、交代にユミ姉を用意させようとベンチを向いた瞬間、相手のどさくさスロインからクロスがど真ん中に入った。

蘭が担当していたFWが、フリー。

ヘディングが綺麗に合う。至近距離、忍にはなにもできない。

マズい。

全員の心に警報が鳴り響いた。今までこれだけ圧力を掛けても崩せなかった敵陣を、あと五分でこじ開ける必要がある。しかも一点獲った以上、相手はもう死に物狂いで守ってくる。

実際そのまま、守り倒されて、タイムアップ。

具体的なミスとしてはもちろん、蘭が傷んだ時にマーク確認をキャプテンかコーチがすべきだった、という一点になる。しかし、本当に強いチームというものは、全員が「いまなすべきこと」を瞬時にアジャストして臨機応変にやれるものであり、普段マーク役を担ってない誰かが代わりにやればいいだけのことである。もつといえ、私が私かと声を上げるべきだ。

つまりその、全員に、どこかしら試合にコミットしきれてないからこそ、起きた事故、いや、ミス。

『……ひとつはそこだ』

大地は腕組みをしながら、よろよろと立ち上がる選手たちを見るともなく見ていた。

われわれはまだ、そういう「本当のチームプレー」ができる強いチームではない。

もう一点。

その弱点がなぜ今まで顕にならなかったかといえば、華やかな攻撃で点を獲って、

あるいは獲れる感觸を得続けることで、精神的な優位に立つてこれたからだ。

調子に乗ると、強い。

でも今日は、調子に乗れなかった。
なぜか。

これはまだ、見えない。

大地は歓喜に湧く敵将と握手を交わす。力強すぎるその握力と、泣き笑いに、
「この一年」を感じた。

この執念の差も、確かにあろう。

「いやあ次、がんばってください！ ナイスチーム！ ナイスチーム！」

「そちらこそ。決勝、勝ってください」

「いやあ……いやあ……ありがとう！ ありがとう！」

『令言巧色少なし仁』か。あれ？『巧言令色』だっけ？

とつまらないことを考えながら、一足早くロッカールームに下がる。

「だいちー！！」

見上げると、いつも来てくれるサポーターのみんなの顔。ありがたいことにそこには非難はひとかけらもなく……

不安と心配。

まるで入試会場に向かう、一人息子を見守る父や母。

「……すみません」

ひとつ頭を下げると、その姿勢のまま小走りになった。

——ロッカールームは、お通夜。

しょんぼり俯き加減な選手達に向かつて、大地はゆつくり優しく、声を掛けた。

「……まず、まだ、終わったわけではないので」

すこしだけ、視線が上がる。

「修正や反省は明日にしよう。今日は夜、おいしいものでも食べて、お風呂に入って、ぐっすり寝てください」

それ以上、言うことはなかった。

「……まだ僕らの戦いは続きます。

それもすぐにやってきます。

済んだことにかまってる時間はありません。

顔を上げて胸を張って、明日から、やり直し。
いいかな」

ぼそ……ぼそ……

「千里、返事は？」

「はイッ!? あ、ハアイッ!!」

みんなも！」

「「……はいっ！」」

「よし、着替えて帰ろう」

「……ボクのせいです！ すいません!!」

その大きな背を丸めてベンチに掛けていた蘭が、顔を覆った。
あ、いかん、と大地が思う間もなく。
ももがその背を抱く。

「蘭ちゃん違うよ！ 蘭ちゃん怪我してたもん！ 私が」

「怪我なんかしてないです！ 鍛え方足りないからふらついてコーチに心配かけて……すいません……」

「だから、それはいいの。私がちゃんと指示してればね、なんの問題もなかったから」

「いえ、私が！ 余ってましたから私がすぐマークにつけばよかったんです！」

明日葉が叫べば、

「いや……あそこで確認飛ばさなあかんのはウチやろ。何年サッカーやっとなねん。

すまん」

ナナがフォローし、

「アタシ完全に他人事で前で突っ立ってました。一人足りなくなるならアタシがま
ず帰らなきゃ……すいません！」

可憐が頭を深々と下げ、

「いや……それを言うならGKだ。なぜあんな状況でボールとキッカーだけ見てた
のか……自分が、情けない」

忍が拳を握って、

「……いや、まあ、きょう、あたし、まともなクロス、あげれてないし……」

流乃までもが変な顔をしている。

いつしか「すみません」と「ごめんなさい」と、それから……涙と嗚咽の渦にな
る。

直接はなんの責任もないリザーブの五人も、いや何も関与できなかったからこそ、
悔し涙の粒は大きくなった。

大地は心でため息をつく。

やはり感情は素直にこうしてその場で吐き出さねばならず、格好をつけたつい先

程の自分を反省した。

すこし、美緒を見る。

キャプテンも微笑笑で、みんなを見守っていた。ただ彼女は、自分責めの輪には加わらなかった。感じてないわけではなく

「全部キャプテンである私の責任です」

と言ってしまえばそれまでだからだ。事実でもあるし。

『こういうところが、この人は凄いなだよな』

と思った。まるで亡くなった家族の枕元で葬儀の段取りを考えるお母さん。

と、もうひとり。

視線に気づいてそちらを見ると、

『どうでしょう』

という表情で僕を見つめている古都に気がついた。

ひとつ、思いついた。

やったことはないし道徳的にはどうかと思ったが……新しいことには、なんでもチャレンジだろう。

特に、こういう場合。

軽く目配せした。

マネージャーは小さく顎を引いた。

嘆きの輪はなかなか、収まらなかった。

■秘密会議

「……こういうのは初めてですな」

「内緒だよ」

「もちろんでんがな」

「代表とかでも、ある？」

「いや、ウチらは……カレ、経験ある？」

「ナナさんに無くてアタシにあるわけないじゃないですか」

「いやあエース様やから」

「うう今その単語堪えます」

「すまんすまん、嫌味やないて」

ここは五人とも初めて来る隣町のファミレスだった。五人バラバラにまるでスパイが尾行を巻くように集合した。

忌憚なき意見交換会。

経験豊富な難波鳴海と此花可憐、主将長居美緒に、マネージャーの住吉古都、そしてコーチ・上町大地。いわば「首脳陣」限定会議であり、もちろん透明・公平を心がけている大地には、初めての試みである。

「出席これだけですか」

「うん。」

ぶっちゃけ話を、聞きたくて」

「せやなあ……まずメニュー。ウチこのスーパーアメリカントリオ・デ・ハンバ―グ、大盛りセット」

「あ、美味しそうですねー。あでもハンバ―グって感じじゃないかな……アタシ三種のトンかつ御膳ライス特盛で」

「なにー!? 三種でなんやー」

「ロース、フィレ、そして味噌!」

「それ分け方おかしくないか」

さすが国際経験豊富な、三つ四つからサッカーをやっててキャリア十数年、な二人は、

「お二人はさすがに切り替え早いですねー」

「あたりまえやつちゅーねん。」

「みんな負け慣れなさすぎ」

「アハハ、そうツスよね。」

ドイツ人やスエーデン人に体格と体力だけでボロカスやられる経験してると」

「アメリカンにパンチされチャイニーズにキックされ。」

外人はサッカードを格闘技やと思いますや。

いやあ、クリーンな戦いで負けるのはまだ幸せですよ。敵は審判でも無いピッチでも無い日程でも無い暑さ寒さでも無い。自分たちが弱いから、ですからね。普通に泣けます」

「ですねえ。」

日本代表強い強いって言われますけどホントか？つていうぐらい負けますもんねえ」

「日々の負けが、だいじなところでの勝ちを生むのです」

「さすがですねー」

古都が素直に感心した。

「さて私は胸がいつぱいなので、このシーフ・ドドリアとマルゲリータぐらいしか入りません」

「シーフ・ドドリアもいいけど私はこのラザーニャが……でもこれだけだとちよつと足りないかな、パスタ・ジェノベーゼと」

「あ！ キャプテン、特盛ポテト分け分けしません？」

「あ、じゃあそれで。ケイジャン成分はどうする？」

「そんなのだいたい美味しくくないです。謎パウダーパラパラで」

「だね。じゃあ、ノーマルで。大地君は鯖味噌煮御膳かな」

「よくわかるね」

「長い付き合いですもの」

「あ、ポテトアタシたちも一皿行きます？」

「ピザにせえへん？」

「それだ！ チョリソとサラミ」

「マヨコーンやろ？ 今のウチらには油が必要や」

「二枚いきますか」

「いつとけー」

オーダーが来るまでどうでもいい話題で場をほぐして、ファミレスのかいテーブルに乗り切らない皿が来た。

「……まあはつきり言わせてもらうなら」

ナナ、もぐもぐ口と手を忙しく動かしつつ。目は大将を見据えつつ。

「あーの見切りを早くして欲しい。」

今日も途中、マキやんでも入れてたら勝てたで。残り二〇分でも」

「あ、それは思いました。」

ありす今日また特に良くなかったですね。たとえば……ユミ姉さん左SBに入れて流乃姉上げて、アタシ真ん中とか」

「うん、まあ、それは、いつもの」

「わかる、わかるで、ヤツは八九分寝てても1プレーで試合を決める女やっちゅーのは。せや・けど・もや。モノには限度っちゅーもんがある」

「『匂いがしない』ってことはありますよね」

「そそそ、今日はそれ。」

そういう時には、スパッとですね」

「うん、まあ……他には？」

あまり触られたくない話題なのか、大地が促した。

天王寺ありすは彼のこだわりどころで、こだわりどころということは、合理性では説明できない。説明できないということは、黙ってそうやってくれと言うしかない。

それはまあ、ナナも可憐も承知しているので。

「失点場面は……人で掴まえるウチらの弱点が出たけど」

「まあ、あれはかなりイレギュラーでポカッとエアポケットができた感じなので」

「けどああいうデイトールをキツチリしていかなあかんね」

「あれは僕も指示叫ぶべきだった。蘭が心配で、ちよつと頭回らなかった」

「おはなとか何も言うてなかったん？ 氷の女が」

「いや、言ってたかもしれないかったけど聞こえてなかったな……古都は」

「すみません、わたし蘭さんところに居て」

「あーそうだったごめん。こんなことも忘れてる」

「まあしょうがなし、かなあ。ああいう出会い頭は起きんねん。問題はそういうことを起こさないことと、起きてもいいように点を獲っておくことであって」

「クロスの前スローイン対応に行つたの誰でした？ 向こう三枚残つててこつち前残りアタシとあーだけなんで、足りないはず無いんですけど」

「あれ？ るーやないの？」

「違う。確かエレちゃん」

「なんでや。るーどこにおつたんや。また前でサボつてたんちゃうか」

「エレ一人だと二人でぼぼんとやられると外されちゃいますよね」

「流乃姉サボるのいいんですけどコソコソサボるんですよ。あれよくない」

「脚使つたんで休んでますってわかるように休んで欲しいんやけどなあ……プライドが許さんのよあいつはね」

「でも、じゃあ、そうしてたらどうしてたか、つてやつぱりエレちゃんが一人でいつてたよ？」

「そこや」

「コーチ、替えは考えませんでしたか」

「ん。」

大地、ファミレスには珍しい鯖の小骨を取り出しながら、タバスコたっぷりのマヨコーンピザを饅頭のようにくるくる丸めて喰うナナに。

「……特段悪いところがなかったことと、攻め入れても状況打開は難しいし守りもさほど疲れでどうにも、という感じではなかったの……」

「確かに体力は余ってんやよね今日はね。それがまた悔しい」

「上手かったです、相手。あのディフェンスは参考になるかも」

「相手によつてプレスの方法変えてたよな。ウチらには徹底ディレイで」

「エレとか胡桃先輩にはまっすぐ獲りに行つてビビらせてましたね」

「ハイプレスっていうほど前から行かずに割と持たせて」

「縦パスだけ切つて。」

「キャプテン、出しづらかったでしょ」

「うん。ナナちゃんと可憐ちゃんはかなり隠されてたので、どうしてもクーちゃんに当てるかるーの前に放り込むか」

「そーいやるーも割と走るのは走ってたな」

「でもクロス上がんないんですよ。ここから上げたいつてところに待ちかまえられて」

「ほなあんたがサポート行きいな」

「行きましたよ何度も。でもそうすると胡桃先輩めがけて蹴っ飛ばすことになるんで」

「あー、今日のイマイチなあーちゃんでは頼んないなあ」

「ほなナナさんがサポート行ってくださいよ」

「行きましたかな何度も。すると右、相手の左をですね、ゴリゴリ進まれて明日葉が脅威に晒されるわけです」

「そうだ私割と今日右ケアが多かった。失点の時も右が気になって、すぐエレちやんのサポートにいくか、そもそも私が」

「いやいや、キャップは『水を運ぶ役』ですからしょーがないッス。あの時間帯ですしカウンターに色気が出るのは当然ッス」

「このへんも、要は、誰でもがカウンター起点になれるような強いチームやつたらええんやけどね」

「まあそういう欲を出しすぎなかったからこそ今のアタシたちはそれぞれの個性がいちおー活かされているわけで……」

談論風発。

食事が空になつても、デザートとドリンクバーのグラスが並んだ。
オレンジジュースをちゅーと啜つて、ナナ。

「……このクラスになると研究されてのーでも五分でいろいろバレるんで」

「そうですねえ、はっぱやエレが経験浅いのとか」

「くーちゃんがあんま足元怖ないから縦入るようならこつちに入れさせとけとか」

「もも先輩はフィード怖いけど脚は遅い、蘭先輩は逆、とか」

「あと『10番は避けとけ』とか」

「真ん中來なかつたねえ。かなり狙つてたんだけど」

「いやあ、バレバレつしよ、あんなにCB（センターバック）が間開けてその前に
デンと居座つてると。しかも10番でキャプテンだし」

「『私カウンター起点です』つてゆーてるよーなもんやからな。ま、せやけどその
おかげで八五分何事も無かつたわけで」

「……やつてゐることは、基本的に間違つてはいなかつたんだよね、今日もね」

「ん。ウチもそー思う。」

だから『あー引つ込めたら』つていうタラレバが一番に出たんや。なんか確実な
問題点があつたらそれを指摘してる、と思う」

「アタシもそう思います」

結論めいた。

「……コーチは、どう思われたんです？　こういう会を開くっていうことは」

「いや、ざっくり同じさ。今日別に悪くなかったと思うんだけど、負けた。もし現場の目で見て問題点があれば、と思ったのさ」

「なるほど」

「こつとん、こつとんの目から見ても、どう？」

「あ……はい」

古都は健康青汁の青いカップを手にも目を天井に向け、

「……その、偉そうなことを言うようですが、ベンチがちよつとベンチ過ぎるかな、と思いました」

「「あー……」」

フィールドワーカー三人が、ため息をついた。

「それうちの悪いとこやねえ。ええとこかもしれないけど」

「サポーターになっちゃうんですよね、がんばれー！つて」

「『ウチを出せウチを、なんとかしてやるから』やないとなあ」

「みんな人がいいからなあ」

「逆にコーチ、質問いいですか」

「どうぞ」

「蘭さん落ち込んでましたけど、あれは……」

「いや、あれは蘭落ち込まなくていい。こんなことを考えても意味ないけど、もし誰が悪いという言い方をすれば、チームで一番悪くない」

「せやね。」

蘭はああいうとこ前から妙に責任感と正義感が強うて」

「自分が許せないんですよ。わかります。」

悪い悪くないの前に、『頑丈さ』で普段貢献してるつもりなのに、肝心要のここ一番でそれが足を引っ張ったわけですから、自分の……いわば、美学の問題で。

逆にアタシなんか今日は無得点なこと落ち込まなきゃいけないと思います」

「じゃあ、素人の提案なんですけど、次は一度外してみるの、どうですか？」

「……」

労働者三人がすこし想像力を働かせ、経営者は嫁が淹れたホット煎茶を口にした。

「……大胆やな。」

けどシヨック療法としてはありか」

「余計落ち込みませんか、蘭先輩」

「代わり誰すんの、キャプテン」

「ユミ姉さんかな……はなちゃん、もうさんと相性あんまりなんだよね」

「仕切りたがりやからな。そうか3バック……いやそこまで無理することないか」

「……ん。それもオプシオンとして考えてみよう。蘭はあの天真爛漫なところがいいので、迷いがあるとパフオーマンスがガタ落ちしそうだし。」

いいアイデアだね。さすがこつとん、よく観てる」

「いいえ。ただちよつと、ベンチのみなさんにも刺激が欲しくて」

「うん。ああやつぱり今日一人でも二人でも突っ込んだいた方がよかったかなあ、戦術的な意味ばかり考えず、『次もある』という戦略的なことも考えて」

「超人やあるまいし、そこまで考えんでええです、大ちゃん」

「アタシそれ嫌いなんですよ、『今日は引き分けでいい』っていうの。ピッチはそ

う思つてもコーチは思つてくれるな、つて」

「あ、ウチや逆やなあ。ピッチはどうしてもがむしやらにやつてまうんをベンチは冷静に戦略考えて欲しい」

「なんかお二人のイメージと逆ですねー」

「そお？ アタシクールだよう見えても」
「ウチやホットですよ」

一区切り付いて、店を出た。

「あー喰つた喰つた。今日はよー寝れんでこれ」

「それが一番ですね。あ、ナナさん、空堀先輩に謝つといてくださいね、祝勝会ムダにしちやつてごめんなさい、つて」

「わはは、あの人は大丈夫。そういうトラブルが超好物の変態やから」

「アハハ」

「まあ、来週、派手に祝勝会やつてもらうんが、ウチらの誠意です」

「ですね。」

あーここのも美味しかったけどカラちゃん先輩だからもつと美味しいもの食べさ

せてくれるんだろおなあ！」

「そおですよあの人なんかどつかから変な情報仕入れてくるんです。カウンターだけで看板も出てない古びた焼き鳥屋さんが超ウマイとかね」

「いいなあ！　そこ連れてつてくださいよう！」

「よしやほなこんど二人でこっそり行こ」

「わーい」

「ふふつ、今日はお二人のプロフェッショナルっぷりがちよつと眩しかったですよ」

「いやまあ……」

「……涙の分だけ、人間は成長するの」

この二人は、他のメンバーの何十倍も、悔し涙を流してきたのだろう。

「これで終わり」という試合を、いくつも負けて。

それに比べれば。

「そ。たいしたことない」

「たいしますよ。」

ね、キャプテン」

「うん、そうだね」

古都は本気でそう思った。ほんの数時間前、ロッカールームではこの世の終わりのように思ったものが、いまはこうして「さあ次はどうする？」と前向きに考えを巡らせている。

それもこの二人が、それにコーチが、どつしり構えてくれているからだ。経験は、だいじ。

けどもその経験ってやつは、失敗を繰り返して手に入れるしかない。

——駅で解散して、大地と美緒、すこし歩く。

「……でも今日はちよつと安心した」

「ん？」

「大地君がこうやって特別なことまでしてくれて。もつと突き放されるのかと思つたよ、ロッカールームで」

「ああ……僕も、自分がやってるんじゃないから、なにを言っているのかよくわか

つて、なくて。ごめん」

「いーえー」

「いや、次勝たなきや、と思ってるのは、チームでたぶん誰より一番、僕だよ」
「そお？ そんな風に見えないよ？」

「見せてないだけだつて。」

だつて次負けたら戦力大幅アップしてるのに……僕のせいで負けたことになるじゃないか」

「ふふつ。誰もそんなこと思わない、つて」

「僕が思うんだよ、僕が」

「まあ、そんなことにはなりませんつて」

「お」

キャプテンは、言い切った。

奥歯をちよつと、噛んでみる。

「……やつぱり、私が悪かった。

『なんとかなるだろう』

じゃだめ。

『なんとかしよう』

じゃないと」

「おとなしいな、とは思ったよ」

「大地君がなんとかしてくれと思うってた」

「僕は……美緒がなんとかしてくれと思うってたのかもしれないな」

「お見合い、だね」

「よくないなあ」

「よくないことがいろいろわかったことが、今日の収穫」

「高い授業料だよ」

「でも。」

もしこれを消化できて次、勝てたら、その次も、勝てる気がする」

「……ん。まあ、それは言える。」

『人間万事塞翁が馬』、に、しよう」

ミラクルズは前年、地方予選で優勝して、本戦に出場した。

しかし本戦一回戦、地方予選とは一段レベルの違う相手にそれまでとはうってか

わって攻撃陣は沈黙し守備陣は崩れ、惨敗した。

今日なんとか、例えば可憐の個人技やナナのFKで無理に勝っていても……去年の二の舞になりかねない。

「……コーチは、今日、なにを思いましたか」

「……」

……まだ言葉に、できないんだ」

「じゃあなにか、ぼんやり」

「ん。」

なんていうんだろう……

以前から思ってることだけど、このチームは……ミラクルズは、『きつかけ』がだいじなんだ。

ある一点で、ガラッと変わる」

「そういえば……」

今日は、無かった」

「そう。」

それは降ってくることもあるし、僕がアクションを起こすことで起きることもある

る」

「……じゃまさか、わざと？」

「いやいや、さすがにそこまで悪人じゃないよ」

と手を振る悪人。

目を細める女刑事。

「どーっーだか」

「そのところをもう少し、僕も研究するよ」

「……お願いします。」

みんな頼りにしてるんだから」

ぺこり。

「他人行儀だよ。僕は……僕のために、やってる」

「それでも、お礼は、言うものです。」

「……きつかけ、かあ……」

見上げると、都会の空はどんより曇って星も無い。いや、見えない。

「あるといいね」

「ん。」

「……いや、見つけるんじゃない。作り出すんだ」

「ふふっ」

その積極性をですね、えー……

美緒はほぼいつもどおりに戻ったその横顔を見つめた。

まあ、先は長い。

「……ん？　なんか付いてる？」

「お味噌。」

取ってあげるね」

唇の横の鯖味噌を人差し指先でちょん、と取って、ぱくつ。

言うまでもないがこの味噌は架空の存在である。

「……かつこわるいなあ。服には飛ばないように気をつけたんだけど」
「服に飛んでなければ、上出来です。ふふっ」

まあ、余裕綽々。

問題はチーム内の温度差ではないか、とこれを見た部外者は思うだろう。
だから、こっそり、会議をした。

大地、だんだん自分でも人が悪くなっていくのを感じる。

一将功成りて万骨枯る、どんな犠牲を払っても勝つてしまえば将の手柄である。
いや、僕の手柄かどうかはどうでもいい、とにかく……勝たねば。

「普通にやれば、勝てる」

それを確認したかった。つまり今日は「普通ではなかった」ということで、では、どこが？

まだくつきりとはしない。

「……大地君、鯖味噌煮、どうでした？」

「すごいよね最近のファミレスって。『マズい』って一歩手前、寸前で言わせないの。もう芸術だよ」

「 Pasta と ピザ も？」

「うん、**麺**も**ドー**も**チーズ**も**ソース**も**ギリ****ツギリ**って**感じ**で」

「すごい経営努力だ」

「これを美味しきに向ければ、素晴らしいレストランになりそうなのに……努力の方向を、間違えてるよ」

「ははつ。美緒の鯖味噌煮がどれだけ美味しいか確認できただけでも、収穫さ」

「まあまたおじょおずをゆうーでしよーうおほーーほーーほーーほーーほーー」

ていうか大ちゃんは常時たらしてますね。

「お口直しに今から作りに行きましょうか!!」

「いや、きょうは、もう、おなかいっぱいです。いろいろ」

「ちえ。……そうだね。鬱憤晴らせて、よかったよ、コーチ」

ああ、そういう効能も、あるか。

じゃあやつぱり全員の方がよかったのかな、掴み合いの喧嘩でもして、ね。

「……まあ、がんばろう」

「それしかない、ね」

S

——薄暗いリビングのソファに寝そべって、大地、真新しいメモ帳の真ん中に「きっかけ」と書いた。

ある日部室で、三十六が何か書いてるので覗きこむと中央に「舞台」と書かれて周りに様々な単語や短文が並んでいた。その間を線や矢印が繋ぐ。

聞くと、自家製「マインドマップ」だという。

「まあ簡単に言うんですけどね、言葉や思考というのはそれ自体に別の言葉や思考を引っ張りだす力があるんですよ」

「ほう」

「だから、こうして字や記号で表してみても、それを眺めてると、周りにこういういろんなアイディアが、浮かんでくる………こともある」

「なるほど。………僕にもできるかな」

「できますとも。」

大ちゃんをよくノート取ってるから、ちよつと慣れれば。スタイルは曼荼羅風にしたり、ダイレクトトリツリー型にしたり……やり方は、いろいろあるので、自分でチューニングするのがいいね。正解はないんで」

「ふむ」

それをやってみようと、メモとペンを手にしたわけだが。

疲れもあるからか、ボーッとして次の言葉が、出ない。

ナナと可憐の言葉を思い出す。

「ありすを落としていれば」

よくわからないのでこれも書いてみた。

二本、線を引く。

・マキを右ウイングに入れてガツガツ突破

・ユミ姉を底に入れてキャプテンを上げる

マキの方からさらに線を引いた。

・結局胡桃めがけて放り込みになるので、ナナが右にいるのと変わらない

ふむ。

ユミ姉の方から線を引いて、

・トップ下を替えたいならナナを真ん中にすればいい。底がユミ姉とエレだと前後

が分断されがち

ああ、だから僕は積極的に替えたいと思わなかったのか。言葉にするとわかりやすいな。そこに罣があるかもしれないけど。

じゃあ、逆だ。

「なぜ、ありすを置いておきたいのか」

線を引く。

これはもう、チームを率いた最初の試合から変わらない。

・「何か」が起きるから

これだ。

基本的にミラクルズは弱者である。特にこれからはそうだ。たとえば高校生のチームが相手でも、最近は女子サッカーでも（聖愛学園のように）全寮制で全国スカウトで優秀な監督が率いてフィジカルコーチがついて……というチームがゴロゴロある。

そんな相手に真正面から正攻法でぶつかって、勝てるわけがない。

奇襲、搦め手、一点突破。方法はなんでもいいがとにかく、「ちがい」を生み出せる手段をひとつ、ふたつ、みつ、用意せねばならない。

ナナと可憐はもちろんそういう選手だが、もつと、そう、「意外性」が、「なにをやってくるかわからない」というカードが必要で……

でも今日は、何も起きなかった。

常に何かが起きるとは限らない。いや、ありますが、何かを起こしてくれるとは、限らない。

これではまるで、貧乏から抜け出そうと宝くじを買い続けるようなものではないか。いやそれは言い過ぎか。

「……いや待て、ありすじゃなくてもいいんだ」

そう、「ちがい」を生み出すのは、誰でもいい。いままでだつてそうしてきたではないか。ベンチだけ見てもマキは突破力で、ユミ姉は守備力で、愛は引き付ける力で味方にスペースを生み出し、はなこはキレのいい守りで攻撃にもリズムを生む。千里だつてあるいは、あの異常な反射神経なら、あのヘッドを止めてくれていたか

もしれない。顔面で。

「……ちがい、ちがい、ちがい……
きつかけ、きつかけ、きつかけ……」

「ギア・チェンジ」とか「ペース配分」とか、いろんな単語を書いてみた。

ギリギリまで力を圧縮して、一点で一気に爆発させる。

そんなガソリン・エンジンのようなことが、人間の組織で本当にできるのか？
どんなガスを圧縮して、どんなプラグでスパークを起こすんだ？

……そう、プラグは小さな火花を散らすだけだ。爆発は、チーム全体に充満した
「なにか」に火が点いて起きる。

それはなんだろう……

言うまでもない、「勝ちたい」という気持ちしかあるまい。「点を獲りたい」でも「負けたくない」でもいいが。

だからこそプロでさえボーマナスの人参を釣るし、「代表の名誉」というフィクションを国中ででっち上げて忠誠を献身を強いるのだ。

確かに、それは、きょう、薄かった。

「誰かがなんとかしてくれる」と、僕もキャプテンも思ってた。ぐらいだから、みんなそうだった。ナナや可憐にしたって、賭ける物が小さかったから、負けてあんなに余裕があるのだ。本当にすべてを賭けていたら、悔しくてメシなど喉を通らない。

栄光のメキシコ五輪代表チームは、三位決定戦で地元メキシコを破る殊勲を挙げ銅メダルをもぎ取ったあと、宿舎に帰るや水も飲めずにベッドに倒れこんで眠ったと言う。

その姿に感動した日本サッカーの父、デットマール・クラマーはバイエルンを率いてUEFAチャンピオンズカップを勝つ、監督として最高の栄誉に包まれながら、なお、

「私の生涯最高の瞬間は日本代表の銅メダルの瞬間だ。あれほど死力を尽くしたチームを、見たことがない」

それが、今日の試合ではなかったか。

なにが足りないこれが欲しい、そんな生ぬるい話を、コーチである僕自身がやつてゐる時点で、おかしい。

『……こんなあたりまえのことも、間違えて、間違えて、間違えて、長々会議した挙句に、メモ帳まで持ち出して書き出さないと、気がつかないのか』

自分の、そして人間というものの愚かさに愕然とした。
が、方策は見えた。

要するに人間は愚かなので、自分の愚かさをいつも確認していなければ、道を間違ふ、ということだ。

メモ帳を額に載せて、瞼を閉じた。
一瞬で眠りに落ちた。

■再起動

——翌日放課後。

まだ疲れは隠せず、幾分弛緩した雰囲気ของทีมが集った。だいたいいつも試合明けは、疲労回復の軽メニューか、それも無しに休息のことも多い。だから今日も……

コーチがメモ・ボードを手みんなの前に立った。

「……昨日、いろいろ敗因を考えたのですが」

いつになく丁寧な口調に、ん？と耳をそばだてる。

「全部、僕が悪いです」

「「……」」

いや、そんなことは、という言葉が放たれる前に、

「なので次、負けたら、僕は辞めます」

「「!!!」」

衝撃が走った、などというものではない。崩れる可能性なんか考えもしなかった大地が、地割れを起こして大きな裂け目を開けている。

「そんな、コーチ」

掴みかからんばかりの勢いの千里を手で制して、

「これだけ優秀な選手を預かっておいて、去年もできたことができませんでした、では、みんなにも、それからサポーターの皆さんにも、言い訳のしようがありません」

「で、でもチームが勝つのは全員のおかげ、チームが負けるのは全員のせい、っていつもコーチは……」

珍しくうろたえているものの声に、

「もちろん今もそう思ってる。

だから辞めるのは僕のがまま、『自分で自分を許せないから』です。ごめんなさい」

なんとも言葉にならない。

「……勝てば、いいんですよ。コーチ」

可憐が凄みのある声で低く言った。

「もちろん、勝てば、まだやらせてもらいたい」

「よっしゃ、勝と!!」

ナナが吼える。

コクコク頷くものの、拳を握るもの。さつきまでのゆるい雰囲気は、一片も無い。

「………については、『僕の最後の試合』になるかもしれないので」

ゆつくり言う。

「ゼロから全部見直して、まっさらな気持ちで指揮をしたい。だからメンバーも、フォーメーションも、リセットします。

これから一週間、僕に調子の良さと、自分になにができるかを、アピールしてください」

「ヨーシ、ヤツタルデー!!」

マキが大声を上げる。

「でも今日は昨日の疲れもあるので、軽くジョグして体幹ストレッチしたら、あとは『軽うくく』『お遊びの』紅白戦、ぐらいで。

『明日から』ハード目に追い込んでいこうか。

じゃあ、始めます!」

「「ハイッ!!!」」

古都は顔をしかめてのけぞった。

こんなバカでかい返事、聞いたこと無い。

一六人が束になつて一糸乱れぬジョグしかも無言、が始まり、ギリギリと身体が軋む音が聞こえるような体幹曲げ伸ばしが黙々と行われ、そして……

「あー！ 今の取つて!!」

「もうすこし前のスペースに出してください！ 走つてゐる後ろ足に出されても取れません！」

ありすとユミ姉がプレーで怒鳴り合うなど、いままで想像もできなかったことだ。そこかしこで言い争い寸前の指示と議論が勃発し、額と額のぶつかる距離で、胸ぐらを掴み合うようにして口角泡を飛ばす。

まして身体のおつけあいに至つては勝手知つたる相手でかつ審判が居ない分、明らかに試合よりも厳しく激しい。

「くー！」

「ンッ……カッ！」

「ぎゃつ」

ももがまたクリンチで胡桃の自由を奪いかけると、胡桃は長い脚をその股に差し込んで捻り、地べたに転がす。もちろんももは道連れに引きずり倒す。キャットフ

アイト……いや、大相撲。

もうなんか、こうだったら絶対昨日勝ってる一〇〇%、と誰が見ても思う。

「……さすがです、さすがです、さすがです。大事なことなので三回言いました」

「いや、昨日のみんなのおかげ。古都の意見も、効いたよ」

「いやいやいや。いやいやいやいやいや」

正直な感想だった。チームの雰囲気こんな一瞬でこんなに一八〇度変えてしまふなんて。しかも何のトリックも無ければコストも掛かってない。

「僕辞めるかも」

つて言つて、

「みんな横一線です」

と伝えたただけだ。それだけだ。昨日のこちやこちやした話なんか一切関係ない。

この人はやつぱり……魔法使いだ。あるいは無から有を生む、錬金術師か。

やつぱ「天才」つて居る。

どんな分野にも。

「……人間、綺麗事では動きませんね」
「うん」

「仲間のため」とか「楽しくサッカー」とか、全部大嘘だ。いま彼女達は、「コーチに居て欲しい」と「その試合に自分が出る」の、自分の欲求に突き動かされているだけだ。だが、その内から噴き上がるような力こそ、本当の力。これを一つの目的に向かってまとめるのが、コーチの役目。

「……どんどん人が悪くなつていく気がする」
「ええー」

元からちよつと天然でお悪い気もするんですけど。

「……ただ、そういうのはどうでもよくて」
「はい。目的が達成されれば」

「うん。これもいつもいつもだと疲れちゃうのかもしれないけど、ここ一番はやつ

ぱり、自分の中の湧き上がるもの、でないと」

「はい」

『……それでも、叶わないものは、世の中にいっぱいあるのに』

古い傷を思い出した。ただもう、古いからか、痛みは感じない。

これ以上無いほどめいっぱいやったから、ジクジク疼く癒えてない傷にはなつてないのかもしれない。

「……わたくしもがんばらねばマネージャーをクビになります。後ほど空堀先輩とサポーターの皆さんの盛り上げ方を」

「そうしてください。彼は『このピンチをチャンスにする』と盛り上がっています」

「ああー……確かに絶体絶命の方が視聴率とか、あがりますよねー」

「あいつのなんというか、いつでも他人事というか鳥目線っていうのも凄いだ。なんていうか……たまにカチンと来ることがある。お前ことの重大性がわかってるのか、真面目にやれ、って」

「いや、それが、空堀先輩流のコミットの仕方、なんですよ！」

「いや、わかつてはいるんだけどね。誰より助けてもらってるし」

「いろんな人が居て、チームです」

「うん。」

お説教されちゃった」

「あつ、すいません。ドリンク用意してきます」

「次はとびきり冷えたのがいいかな」

「いつもの『井戸水ぐらい』じゃなくてですか？」

「いつもよりホットだろうから」

「はあい」

去ろうとする古都の後ろから、金切り声が飛んだ。

「蘭！ やる気ないならやめて!!」

「あ……ごめん」

CBコンビを組んだはなこと蘭がモメてる。というより、はなこが叱り飛ばして

る。大地が歩み寄る。

「どうした」

「コーチ！ さつきから集中力ないの！ 組み替えて！」

「蘭、足、痛むのか」

「あつ、いいえ、大丈夫！ です！」

「ホントか」

「本当！ 平気！」

「すみません！ しつかりやります!!」

声は大きかったが張りが無い。

見つめた目に嘘はないように思うが、眼がすこし落ち窪んでいる気がする。

まあ、昨日、悔やんで、寝不足、とかそんな。

「けどさつきから！」

「……はな、これが実戦だったらどうするんだ。交代棒一つ使わせるつもりか」
「ぐっ」

「それもDFリーダーの仕事だ。『ももならもつとうまくやる』ぞ」
「……」

うわ、人悪っ。

全身の毛根逆立てて言葉呑み込むはなこ先輩を見て、そう思った。

「蘭。ほんとに少しでも痛みあるなら言え。『お前は絶対に必要な選手』なんだ。練習で怪我悪化させちゃたまらん」

「大丈夫です！ 本当です！」

「よしじゃ行け！」

「ハイッ！」

あそういえば今日は蘭先輩めだたないな。こういう、「気合いと根性」みたいな時にこそ一番輝くタイプなのに。
コーチが定位置に戻ってきた。

「……まーたまた、殺し文句言っちゃって」

「いや本当さ。蘭は強くて・高くて・速い。他に居ないんだ。だから絶対に、必要」

「シンプルですね」

「サツカーつてめちやくちやシンプルなものさ。強くて巧くて走れば、勝てる。その真実をみんな見たくないの、やれ戦術だやれシステムだとゴチャゴチャくだらないこと言つて煙幕張つて、自分を誤魔化してるだけさ」

「コーチがそう言いますか」

「言うさ。」

僕の役目なんてせいぜい……」

なんだろう。

「強くあれ」とケツを叩くことか。

強くあるように特訓することか。

それとも……

「……蘭は『強くあること』に真正面から取り組んでる。その姿勢が、貴重なんだよ」

「あ、ごまかした」

「こつとんも人が悪くなつてきてる」

「コーチと空堀先輩と付き合つてるとどんどん悪くなるんです。ケンボージュッスー慣れしてきて」

「そうやって人のせいにするのが人が悪いって言うんだよ」

「そうやってああ言えばこう言うのも人が悪いです」

「みんな一生懸命頑張つてる時にこんな与太話していては、いけない」
「人悪っ」

糞真面目表情を一ミリも崩さずそんな洒落を言う上町コーチの横顔を覗きこんで、でも古都は、

『コーチも変わったなあ……』

と思った。以前は、そういう「マリーシア」なことはできるだけ避ける方だったのに。

まあそういう、格好をつけてるうちは、ダメなんだろう。家族のために狩りに行くお父さんは、なにがなんでも獲物を仕留めないと。

ガシヤアツ……

ゴール前空中戦、忍、もも、胡桃、はなこ、そして蘭が一つのボールに空中で群がって、団子になって、崩れたジェンガのように折り重なって落ちた。我先にもがき起き上がろうとするところに、あります。

パシューツ……

なんの遠慮会釈もないキレツキレのシュートが、無人のゴールに吸い込まれた。ガツポーズひとつなく、もちろん笑顔もなく、「あたりまえのことをしたまでだ」と言わんばかりにプイ、と自陣に軽やかに駆ける。

あーちゃんの危機感も、半端ではない。誰より彼女が、最良気味優遇気味に使ってもらってることを、自覚している。

しかし『ピンチはチャンス』とは、よく言ったものだ。こんな絵に描いたようなその言葉を表すシチュエーションがあるだろうか。

このチームにはやはり、『ミラクル』がついている。

よし、私もがんばろう。

とりあえず経口補水液の温度調整から……

ああいう燃える姿を観ていると、やつぱり最初に無理してでも選手やってればよかったかな、と思ったりしなくも、ない。

■父帰る

「ただいまあ」

「おう、おかえりい」

「……お父さん!？」

蘭は革靴を脱ぐもどかしく、リビングへ駆け込んだ。テーブルに豪勢なご馳走の数々、ビール瓶、それに真っ黒に焼けて髭面の、父。赤ら顔で目を無くして、笑う。

「わあ、おかえりなさい！」

「はっはっは」

五歳の少女のように飛びついて頬ずりした。ジョリジョリと痛い。

「先にやらせてもらってるぞ」

「うん、もちろん！ 突然で驚いたよ！」

「そうなのよお父さん 今回も朝いきなり『空港に着いた』って。慌ててお材料買いに行つて」

「いやあ毎回スマンスマン。仕事柄、な」

「逆に嬉しいよ！ お父さん、ビール！」

「わはは、ありがたい」

瓶から注ぐと、泡だらけになった。それでも嬉しそうに口を付けて泡を消し、飲み干す父。

「……はー……日本の冷えた美味しいビールを優しい娘に注いでもらう。これ以上の幸せがあるか、なあお母さん」

「優しい妻の手料理は？」

「あ。スマンスマン。がはははは」

「もう。蘭、お風呂入ったら？ お父さん入ったから沸いてるわよ」

「あ、うん、そうする！ お父さん、ゆつくりしててね！」

「もうこれ以上ないほどゆつくりしてるぞ。わはははは」

蘭がバタバタと自室へ消えると、父は母に言つた。

「……蘭、またゴツくなつたなあ……」

「もうお父さんつたら、『グラマーになつた』とか『胸が大きくなつた』とか言つてあげなさいな」

「いやあ、なんか体幹が凄いんだ。ほとんどプロレスラーだぞあれ。ウチでもあんなのはなかなかおらん。サッカーつて、あんな鍛えられるものなのか」

「さあ……そもそもゴツいのはお父さんの遺伝でしょ」

「良かったのか悪かったのか」

「顔が濃ゆい縄文系なのもお父さんそのものだし」

「それは良かっただろう。我が娘ながらもの凄い美人だ」

「今風じゃないですけどね」

「いやいや、これからは沖縄にアイヌ、縄文系の時代だ」

「七〇年代じゃありませんよ」

弥生系すつきり美人の母は反論を繰り返した。蘭は父一人で生んだのかと思うぐらい、心身ともに父そっくりだった。まあ、一人目があんなに「私一人生み」みたいな私そっくりだったから、しょうがないかもしれない。神様はそういうところ、変なバランス感覚がある。

「女は太眉に限る！」

「どうせ私は眉ありませんよ。ごめんなさいね」

「毛抜きと描くのとどっちが面倒なんだ？」

「知りませんよ、私抜いたことないですもの」

そう言いながら妻の顔も緩んでいる。

蘭の父は、自衛隊員だった。以前は現場で指導教官までやった猛者だったが、今はロジスティックス（兵站）系の涉外任務に就いている。極秘で中東やアジアに飛ぶことも多く、いつ家を明けていつ帰ってくるか、家族にも知らせない。

風呂あがり、着替えた蘭も加わって、食卓が賑やかになった。

「蘭はごはん、食べないの？」

「お兄ちゃん待つよ！」

「あら。今日も遅いかもしれないわよ」

「けど夕食には帰ってくるでしょ？」

「最近図書館で軽く食べて閉館まで粘ることも多いから……」

「メールは？」

「したけど、場所柄見てないこと多いのよー」

「相変わらずあいつは勉強家だなあ。誰に似たんだ」

「私に決まってるじゃないですか」

「「えっ」「」

「蘭まで」

「わははははは、まあ、身体壊さなきゃいいんだが」

「気をつけるようには言ってますけどね。『お医者さんが身体壊したらカッコ悪い』って。そういうと『まだなつてないから』って言い返されるの。ああ言えばこう言う、誰に似たのかしら」

「「それはお母さん」」

「蘭まで……」

「いま受験の追い込みだからしょうがないよ。お兄ちゃんの夢の第一歩だもの」
「まあねえ。世のお母さん方は心配するのかしら。私は身体の方が心配なんだけど」

「その、あー……防衛医大は結局、受けることにしたのか？」

「知りません。お父さんお聞きなさいな」

「いや、俺が聞くと催促してるみたいじゃないか」

「そんなんで志望変えたりするような意志の弱い子じゃありませんよ。私に似て」

「えー……」

「いや、まあ、俺の稼ぎがたいしたことないので、国公立に絞らせてしまおうのが心苦しくてなあ」

「防衛医大って、学費タダで、お給料まで貰えるんだっけ！」

「うむ。そんな大きな額じゃないんだが。ただし自衛隊に入隊せんといかんのだが、それも一〇年勤続すればいいからな」

「それいいと思うんだけどなー」

「蘭はどうだ」

「ボクは無理だよー。お医者さんなんてとてもとても」

「……自衛隊の方は、あいかわらず考えてるのか」

「うん。あと警察官！」

「うーん……」

「あらお父さん。昔はニコニコ喜んでいたのに」

「いやあ、最近、キナ臭くてな」

腕組みをして、遠い目をした。

妻娘は、あえて問わない。きっと今回の出張でもいろいろ、見て聞いたのだろう。

「ひよつとすると、我々も、戦地に出ていかねばならん日が、来るかもしれない。

自分が行くのはともかく、娘は行かせたくないな、と……」

「そうですね」

「おまわりさんの方が、いいぞ。刑事とか」

「おまわりさんだつて最近は危ないじゃないですか。通り魔にテロ。日本でも」

「まあもちろんそうなんだが。お母さんはどう思う？」

「蘭は保母さんとかいいと思うんですけど」

「えー、ボクそれも向いてないと思うんだけどなあ……」

「はっはっは、昔から蘭は子どもと動物受けがいいからな」

「豊もそうね。なんだか昔から。これはお父さん似と認めざるを得ないわ」

「はっは、そうだな。子どもの頃兄妹で『動物ふれあい広場』で遭難しかけて」

「そうでしたそうでした。お父さん酷いのよ。ゲラゲラ笑って助けようとしなくて」

「小動物ばかりだから大丈夫じゃないか。仏陀の最期みたいで壮絶な光景だったぞ」

「縁起でもない」

「それ覚えてないなあ……」

「私もびつくりしちゃって写真撮ったりって気が回らなくて。豊が蘭を一生懸命守っててね、あ、噂をすれば」

「……ただいま。」

ああ、父さん。おかえり」

「おう、今帰った。頑張り過ぎじゃないのか、無理すんなよ」

「それ僕が父さんに言うセリフだよ」

「わっはっは」

「お先に頂いてるわよ。蘭が待っててくれてるから、急いで支度して」

「蘭、別にいいのに」

「へへへ」

ひさしぶりの親子四人に、くだらない話が弾んだ。くだらない話が弾めば弾むほど、いい家族。

「……豊、あいかわらず彼女はできんのか」

「できんのじゃなくて作ってないんだって。受験勉強忙しいし」

「負け惜しみだなあ。おい蘭、紹介してやれよ。お前のチームはみんな可愛い子ばかりじゃないか」

「お兄ちゃんならいつでも。誰がいい？」

「いやいや、だから作ってないって言ってるじゃないか」

携帯を広げて集合写真が無理に見せる。

「ちいさいって、これじゃわかんない」

「大きいもあるよ。というか、どういのがタイプ？」

「お母さんみたいなの」

「「お母さん黙ってて」「」

「あら」

「ま、まあどつちかというとしゅつとした感じの……いやいや」

「しゅつ、つていうとおはなちゃん……は彼氏居るし、えー……あ！年上、あじやない、同い年かな、忍様はどう？」

「……すごい美人だなあ……」

「でしょでしょ？ お父さんが古武術の師範さんで、本人もね、剣道柔道合気道に手裏剣、なんでも来いの達人で」

「うわあ、無理無理」

「だーいじょうぶだよ、乱暴なこととか全然無いから！ 普段はとっても気さくな冗談の好きな先輩で、試合になると鬼になる」

「鬼！」

「その子お父さんが興味あるな」

「ちよつと」

「いやいや、隊員として」

「なんだかね、いま武術を介護に使ったりするんだって。だから忍様はそういうこともいろいろ知ってて、きつとお兄ちゃんと話が合うよ」

「あーなんか耳にしたことあるね。なんか手をこんな風にして車椅子の人を抱えてる動画観たことあるよ」

「抱える」という言葉でイメージするのと逆、つまり相手の背に手の甲を当てるように、しかも両手を組まず、鉤の手にして抱えるジェスチャー。
不思議だな、と思ったがこの方が力が出る、らしい。

「ほう！ それは面白い！」

「お父さんが食いついちやったわ」

「いやあ、指導教官に戻りたいんだよ。今の仕事は汗は汗でも変な汗しか搔かないから変わりたいんだ。日本古来の武術で……うむ……ちよつと蘭、やってみていいか」

「うん！」

「……豊、こんな感じか？」

「いや、正確にはわからないよ。だいたいそんな感じ」

「ん？ こうか？ こうかな？」

「アハハッ、おとーさん、くすぐりたいよ」

「すまんすまん。これを……」

「こう！」

「ふわあつ！」

「「おー」」

元々（当然）力持ちな父だったが、まるで幼子の頃のように、椅子に座った蘭を軽々と抱え上げた。

「ああ、これはいい！」

「あははっ、お父さん、おろしておろして」

「なるほど！ こんな工夫ひとつで全然違うものだな！ 蘭、その子とぜひ一度」

「あ、それはいろいろ研究されてるらしくて、本やビデオも出てるよ」

「本当か!? 日本は時間の進み方が早すぎるぞ。豊すまんが、それ買ってきてくれ」

「わかった。あとで注文しておく」

「あ、買ってきてといえbaumおビール無いの。豊か蘭、コンビニで買ってきてくれない？」

「おう、ビール無いならいいぞ、焼酎でもウイスキーでも」

「出張前に全部空けて出ていったの、覚えてない？」

「ガハハ、そうだった」

「今日はとことん呑んで、お父さん！」

「もちろんそのつもりだ。んーできれば日本酒も欲しいなあ」

「わかった！ でもコンビニのだからあんまり高級なのじゃないよ？」

「なんでもいいんだ。むしろワンカップがいい。酒臭い酒が、ああ、コメのサケが、呑みたい」

「ふふっ」

「僕も行くよ、蘭」

「あ、お兄ちゃんはゆつくりしてて」

「お酒は重いからね。いつてきます」

「いつてらっしゃい」「すまん」

——夜道は、公園を横切るように通る。

「ねえお兄ちゃん、その本とかDVDとか、ボクにも見せてくれる？」

「ん？ あ、さっきの介護の？ いいよ。でもどうして？」

「あのね、あのー……」

もつと強くなりたいたいから。

簡単に言えばそうなるが、なんだか大好きなお兄ちゃんの前でそう言うのは、照れた。

「……あの、試合で勝ったら、大活躍した人を肩車するんだけど」

「ふん」

「かるーく担げるのかな、つて。さっきお父さんも凄い軽やかにボクを担いでた」

「はっは、それは愛娘にいいところ見せたかったから馬鹿力出たんじゃないかな。でもいいよ。参考になるといいね。」

肩車か……仲がいいね、チーム」

「うん。でも今日はちよつと、ピリピリしてたけど」

「へえ、どうして？」

歩きながら蘭は簡単に、説明した。

「策士だなあ、そのコーチ」

ニヤリ、とあまり見せない笑い方をする兄。どうも男女で、焦点が違うらしい。

「そうなのかな。でもこの肩車、お兄ちゃんに教えてもらったんだよ？」

「ええっ？ そうだっけ？」

「覚えてない？ 子どもの頃よくお兄ちゃんに、そう、ここの公園でも肩車してもらって。高いところから見下ろして、オトナになった気分で、ものすごくいい気分だったの！」

「ああそういうばそんなこともしたようなしてないような……」

「ふふっ、こういうのって、してあげた方は忘れるんだよね」

「うん。なんでもないことだからね。蘭はあの頃目がパツチリしてて誰に会っても可愛い可愛いって言われるから、兄としては自慢の妹だった」

「エヘヘ、それほどでも……って今は？」

「あはは、もちろん今も自慢の妹だよ。でも今はもう、肩車は無理かなあ……」

豊は名前に似合わず華奢で小柄で、蘭と並ぶとまるで蚤の夫婦のようだった。体力的には別に普通だと本人は思っているのだが、なにせあの父とこの妹がいる。

「健康」のハードルが極端に高い家で、で、ひ弱扱いされている。小学生頃には反発もしたが、もう慣れた。実際、このハリウッド・ダイナマイトを肩車、できなくはないが想像しづらい。

「そんなことないと思うよ。やってみる？」

「いい、いい。持ち上がらないと傷つくじゃないか。蘭も」

「んー……じゃあ、ボクがやってあげる！」

「おいおい、いいっていいっ……おわあ！」

想像よりはるかに軽々と、まるで羽毛布団でも押入れに上げるように。

「すごい背筋と足の筋肉だな!!」

「インナーマッスを意識するの！」

医学生（志望）とスポーツウーマンらしい会話だった。

「タメて、一気に爆発させるような感じで！ 全身の筋肉！」

ぽーん、ぽーん、ぽーん！

「おわあ！ おわ、おわああ!!」

まるで五〇数キロの豊など担いでないかのように、垂直ジャンプを繰り返す。3m近くになる視界はもはや、絶叫マシーン。

「も、もういいよ！ 蘭！ すごい、すごいのがわかったから！」

ようやく、降ろしてもらった。

「……ふう。こういう『感じ』も、忍様に教えてもらったの。忍様は『タメ』はよくない、つて言うんだけど、ボクはそっちの方が力が出るから……」

「へええ……サッカーなのに？　いろいろやってるんだね」

「コーチが、凄いの！」

嫉妬というか焦りというか、複雑な気分。一つ年下のはずだが、人心掌握だけじゃなくそういう幅の広さと奥行きが……

「蘭、惚れてるな？」

「へえっ!？」

……う、ううん、ううん、無理無理ボクなんか無理!!」

「無理ってことは、狙ってなくもない？」

「ち、違う違う、違うよ！」

そんなこと考えたこともない！」

「ほーんとかー？」

「う、うん、ホントホント。だいたい……コーチにはね、もういい人が居るの」

「あ、そうなのか。でもいいじゃないかそんなもの惚れてしまえば奪い取れば」

「ううん。」

……なんて言えばいいのかな……

二人で一人、なの。だから、好きとか、なんとか、じゃなくて」

「ほーう」

「ふふつ。お父さんとお母さんみたいだよ」

「ふーん」

世の中、いろいろあるんだな。

——二人はコンビニで日本酒にビールに耐ハイ、それに安いウイスキーとソーダ水も仕入れた。乾き物も選んで、重い荷物、を豊が持とうとすると「これ、訓練だから！」と蘭に制された。

家に帰ると、様子がおかしい。

リビングに入ると、父が、広い背を丸めて、泣いていた。号泣、していた。

「お、お父さん！ ど、どうしたの!？」

「ぐえっ……ぐぐっ……ぐっ……」

手で目を拭つて、声にならない。母が、継いだ。

「……お友達が、亡くなられたの」

「そう……なんだ」

「……」

それにしても、様子が激しい。

「……ぐっ……福島……馬鹿……馬鹿野郎ーッ!!」

「おとうさん!」

母がぴったり横でその手を取り、震えるその背を優しく撫でていた。目配せする。豊は頷き、蘭は跪く。

「……おとうさん。しっかりしてね。おとうさん」

その手に手を被せた。握りしめたそれは、固く白くなっていた。殻に閉じこもる

ことで、感情の暴風雨に耐えているようだった。

「おやすみなさい。また、あした」

「ぐっ……ああ。うつ……うつ、うおおおおおおおお……」

父の慟哭を背に、兄妹は階段を上がった。豊は自室に、蘭を誘う。

ポロ、ポロともらい泣く妹の頭を、撫でてやった。ベッドに座らせてあげた。自分分は、机に向かう。

こういう時は、なんでもいい、勉強に没頭するのがいい。

「……おとうさん……かわいそう……」

「軍隊だからね。人も死ぬ」

「……そう……だけど……」

福島のおじさん、ものすごく親友だったよね……悲しい、だろうな……」

「そうかもしれない」

「……自殺じゃないかな」

「ええっ!？」

兄が振り返った。真面目な、哀しい目をしていた。

「あの感じから想像だけど。

イラクから帰還した自衛隊員は二六人も亡くなってるんだ。自殺でね」

「ど、どうして？ 無事に帰ってきたんでしょ？」

「うん。PTSDって聞いたことがある？」

「聞いたことは……ショックなことが心の傷になるんだよね」

「うん。戦場は、兵士は特に酷い。

二四時間、死の恐怖と隣合わせだからね。陸自の基地にもロケット弾が落ちるし、空自の輸送機にもミサイルの警報が鳴りっぱなしだって。そんなもの、どうやって精神が持たないよ」

「……」

「日本の場合因果関係は公式には認めてない。でもアメリカだとイラク帰還兵が六五〇〇人も自殺した年がある」

「ろくせん……ごひやく……それは、戦死した人じゃないんだよね？」

「戦死さ。帰還兵、の。」

こんなものの心的外傷のせいに決まってるじゃないか。いつだって酷いもんさ、国
家っていうリヴァイアサンは」

また机に向かった。

「……お父さんは、だいじょうぶなのか、な……」

「任務が現場ではなさそうだから……でもいつ、そういう場所に行かなきゃいけ
ないかもしれない。家族が、僕らがケアしないと」

「うん……」

心の中が洗濯機のようになって、よくわからない。

まさかこんな身近に、この時代に、この日本で、「戦死者」が出ているとは、想
像したことも、なかった。

もし……

もし、それを自分に当てはめてみたら。

……違う涙が、噴き出てきて、止まらない。

「……お……にいちやん……」

「ん？ どうした、蘭」

振り返ると、妹が、まったく父と同じように広い背中を丸めて、大粒の涙をただボロボロと落としていた。慌てて、駆け寄った。

「……」

「蘭。だいじょうぶだ。父さんは大丈夫だし、母さんも居るし、僕もここに居る」

「……うん……う……」

固く握った両手を、ポンポン叩いてやった。

「大丈夫だから」

「……」

「……かなしい、ね……」

「……」

「…………うつ…………うつ…………」

「蘭、横になろう。ほら、ここ。そんな姿勢でギューツと思いつめちゃダメだ。緩めなきゃ」

「う…………うん…………」

ベッドに横たわせると、目を腕で覆った。

「眩しい？ 電気消そう」

「いいよ、お兄ちゃん、勉強」

「スタンドがあるから」

パチ…………パチ…………

「…………ははっ。蘭は感情の量が多すぎるんだ。そんなことじゃ自衛隊員は諦めた方がいいぞ」

「…………」

…………うん…………そうかも…………」

「……まあ、どうしても、つていうなら、お兄ちゃんは止めないけど」

「お兄ちゃんは、反対するかと思つてた」

「自分の人生じゃないか。」

それに……誰かがやらなきゃならない仕事だ、つていうのは、確かだ」

「……むかし、お父さんと、喧嘩、したよね」

「あは、よく覚えてるね。」

子どもだつたなあ……」

「ううん。お兄ちゃんの言つてたことは、正しいよ」

「正しけりゃいいと思つてるのが、子どもなんだ」

「そうだけど」

兄が中学生に上がった頃だろうか、父と「戦争と平和」について議論してた。中学生らしいシンプルな意見は、

「軍人が誰も居なければ、戦争なんか起きないじゃないか」

というものだった。父、軍人は哀しげに言つた。

「戦争は起きるんだ。だからそれを止めるために、軍人が要る。戦争をしたい軍人は、実は居ない」

それもまた、人間という愚かな生き物の、真理だった。

蘭は大好きなどちらに味方することもできず、ただ居心地の悪さに泣きそうだった記憶がある。

「……今になると父さん言ってたこともわかる。包丁を無くせば殺人が起きなくなるわけじゃないんだ。人を殺すことは、どうやったらできる。戦争も同じ。」

それに今はもう、戦争に軍人はいない」
「えっ……どういうこと？」

「それは極端な言い方だけど。」

民間の戦争会社にお金を払えば、やってくれる」

「戦争……会社……そんなのが、あるの」

「初めは紛争地帯での要人警護とか物資の輸送とか、そういうところから始まったんだけど、今や普通に武装して普通に戦争する。もちろん社員は退役軍人や訓練を積んだプロだ」

「お金で……戦争を、するの」

「紀元前から傭兵という形で、あるんだけどね。あとは、無人機」

「無人機」

「もうすでに何百人も無辜の人々を殺しまくってる。子どもを含めてね。今は遠隔操作という形で人が関与してるけど、無人ロボットが無差別な殺戮を繰り返すまで、もうすぐだ」

「……」

「戦争をするのは、軍人じゃないんだ。人間なんだよ」

いつしか涙はひいていた。

なんてここは、酷い世界なのだろう。

「……おにいちちゃんは、おいしやさんに、なるの」

「なりたいね。」

「救える命は、ひとつでも救いたい」

「……」

その方が、絶対に、いい。

そうやって「戦う」人達がいるから、この世界は、崩壊の一手手前でとどまって

いるのだろう。

「……ボクも……そうしたい……」

「うん。」

蘭、慌てることない。人生は……いつからでも道が開ける。

つて、僕が言っても説得力無いけど」

「ううん……おにいちちゃん……ありが……とう……」

「カーネル・サンダースつて、いるだろう、ケンタッキーの白いおじいさん。あの人がケンタッキーを始めたのがなんと六五歳なんだ。他にもいるよ、物凄い精度の日本地図を作った伊能忠敬。彼が地図づくりに邁進し始めたのは五四歳だ。江戸時代だから、今で言えば七〇、八〇のおじいちゃんがいきなり地球一周するつて言い出すようなものさ。」

だから蘭、僕らならいつからでも……らん？」

すーっ……すーっ……

穏やかな寝息を立てて、大柄な妹は、ベッドに大の字になっていた。
練習で疲れて、腹一杯メシを喰って、感情を迸らせて。

豊は苦勞して、そのやたら凸凹して転がしにくい身体を手打ちうどん職人のように前後左右させて、敷布団と掛け布団の間に押し込んだ。汗だくになった。古武術、僕が必要なんじゃないのか。

寝顔。

とてもとても、可愛い妹だった。

その毛量豊富すぎる髪を撫でてやる。

さつきあんなことを言ったが、もちろん濃い系のルックスでも文句なんか無い。

そう言うのは、恥ずかしいだけだ。シスコン丸出しで。

でも、いつかは素敵な彼氏を見つ

じょおっだんじゃない。

胸の悪くなる想像を振り払って、机に向かい直す。いや、今からでも志望校を一つ上げるか。こんなところでモタモタしてて、いい医師にはなれまい。

蘭を、それから……父を、慰められるような、人には。

■熟成肉

「でゆえっへっへっへ、ニック・ニック・お肉ッ。

おっ、キャプテン用意まかせてすんませんな！」

「いーえー。今日はやりがいあるよー。すっごいお肉」

「ホンマに!? いやっはーお腹鳴るわー。

……これ一年三年には内緒やねんやろ？」

「らしいよ。メインが足りないんだって」

「うへへへへへ。」

……最近こういうの多いね。チーム分裂の危機や」

「満面の笑顔で言うセリフじゃないよ。見る？ あ、いやまかせて、あとで」

「もとよりそのつもりでんがなまんがな。もう全部おまかせっ！」

ぴんぽーん

「……あたしでも満足できる焼肉って、ホントでしょーねー」

「るー言うほどベジタリアンじゃないじゃん。ハムとかよく食べてるし」

「ベジタリアンなんて言った？ 美味しくないお肉があんま好きじゃないだけ」

「そりゃ誰だつてそーよ」

「ナナとかファミレスのハンバーグもしゃもしゃ食べるじゃん。あれ信じらんない」

「最近はアンガス牛とか、凝つてて結構イケるのあるわよ」

「ホント？」

「るーちよつとき、家にテレビも新聞もないのさすがにどうよ」

「パパとママに言つてよ」

「はは、こんばんわー、お世話になりまーす」

夕刻。

自宅の距離によつて私服あるいは制服のままで、三々五々上町邸に集う、ナナに流乃にはなこ、駒川匠カメラマン。もちろん愛と蘭も。つまりミラクルズ二年生の面々。美緒は仕込みに忙しく、パタパタと走り回っている。

今宵は二年生限定・焼肉パーティー。

「……あーい今日はお外ですよー！ 準備できましたー！ みなさんどうぞーう」

三十六が庭にセットしたのはホワイトガス式アウトドア・バーベキューコンロとともに、超近代調理器具・七輪が二つ。

「おつ、いーねーこれ！ なんか懐かしい」

「肉は炭火で焼きませんと！」

木製のテーブルには大皿に赤系統から茶系統の見た目で食欲の湧く肉の色。野菜の皿の彩りも鮮やか。

「いやー豪勢豪勢。最近焼肉食べ放題なんか行くと豚豚鶏鶏イカ野菜、どこに牛さんおられますかーみたいなお店ありますけども！」

「やつと見つけてもロースとかペナツペナなんだよね。向こうの透けて見える」

「はーいちゃんと牛がメインでございますよ、さあさあもう準備万端ですんで、みなさんどんどん……ホスト大ちゃん、乾杯のご挨拶でも」

「いやいや、いいよ普通の夕食だし。」

えー……なにもありませんが、どうぞ？」

「通夜ぶるまいじゃないんだから」

「わはは」

お茶やジュースがそれぞれのコップに注がれ、

「……では一応、えー……」

がんばりましょう。」

「あはは」

「乾杯！」

「かんぱーい!!」

「……これどういう企画なの」

「いやあ、実はですね、祝勝会用の食材で一週間持たないものやお店で使い切れないものがございましてー」

「罪悪感が湧いてくるねえ」

「特にお肉なんですよ足の早いホルモンとそれから……ひみちゆの大砲がありまし

て、それを現在キャプテンに」

見れば美緒は庭の隅で背を向けてうずくまり、七輪を団扇で仰ぎながら、なにやらトングをさばいている。

その背は料理オタク長居美緒にして、いつになく真剣だ。

「……そんなこと言われたら箸進まんやん？」

「いや、あれ一人に分けるとそんな量ないんで、どうぞ皆さんこのへんのお安いお肉でお腹をあつためて」

「無理だ」

「一番空腹に一番美味い肉でしょ！」

「いやいや、まずこのへんのミノ固く焼き締めてしがしがんで頂いて、あのお肉の素晴らしさとの対比用に……」

「あーんなによなになに、どんなお肉！」

「流乃ネエはあいかわらず堪え性がありませんのう。まあまあ、さあさあ、焼きましようかこの法律変わって生で食べられなくなっただけ一〇〇%生で食えとお店の人大保証レバーでも」

「いやー いやー」

「ではキャベツあたりを炙って前菜にですね。まず食物繊維を入れておくと血糖値が急激に上がらなくて良いらしいですよー」

「いやー いやー」

「……あれ、てか二年なら何、千林君とかタカちゃんは」

「あ、えー、お二人はちよつと事情で」

「人減らし口減らしじゃない、んだよね？」

「もちろんですもちろんです。そんな裏切り行為はできません！」

「裏切つとる裏切つとる」

「あ、言うまでもありませんが、一年三年には、内緒、ですよー……う」

「「はー……い」」

「いやあもつと材料あれば全体でできたんですが、この週末本当の祝勝会もせねばなりませんし予算の都合で……ああ苦い味がする夕餉、これがホントの苦肉の策！」

「ぱちぱちぱち」

「……わかつてくれんの僕のプリンセスだけやわ」

「ちやうねんもアレが気になって気になって」

「ちよつと只事じゃないよね」

「あんな真剣な美緒、ピッチでも見たことないわ」

「みーはピッチであんま真剣じゃないから」

「これ二人」

「いつも余裕がある」

「それもクソ余裕」

「その『真剣イコール一二〇％』という日本人独特の考え方はいけませんよ。ガム噛んでニヤニヤしてても、ホームラン打てば正義です」

「まままま、今日はサッカーのことは忘れてー」

「あれっ、忘れていいの？ 私これ二年だけで忌憚なき意見交換会かなと思って」

「ドキー」

「い、いやあ、まあ、あはははは」

嫌な汗を流すナナと大地。

「あーくそムカつく！ 思い出すとムカつく！ やっぱサッカーの話やめよ！」

流乃がその長い脚を蹴りあげた。ブンッ！と頭上を超えて庭サンダルが脱げそうになる。

「あいかわらず脚長いなあんた」

「長くてもいいクロス上がんなきや意味無いわよ。コーチ、ちよつと落ち着いたらクロスの上の方教えてくれない？」

「今上げてるじゃない」

「告白するとあたし横に蹴れないのよ。だからいつもこう身体九〇度捻ることになつて」

「あ！ それでいつもクロスのとゴロゴロ転がつてんのか！」

「こそ」

「あれいつつもカッコつけてんかと思つてた」

「んなわけないじゃん。カッコよく無いし」

サッカーの話である。

「走りながらだところインサイドを擦り付けるといふか擦り上げるようにですね、

ボールの外側をこう」

「ちなみにあたし足首の柔軟性も無いので、それたぶん無理」

「えー、多少は曲がらんかー、これこうこのぐらい」

ナナが脚を上げて足首をくりくりくりりと回してみせる。順回転逆回転上下左右上下左右。もちろん片腿高く上げててもボディバランスは一ミリもブレない。

「うわっ、気持ち悪っ」

「すごい！」

「あ、この人ユース代表の人だ。ユース代表の人だ」

「えっ、このぐらいはあなた」

「人形劇できそう」

「『ハリー、ボク、足くんだよ？』」

「いやいや」

「いや、あのね」

満を持してコーチ登場。

「……流乃は、たぶんそのままでもいい。正確に言うとか、それができるようになると、流乃のいいところをスポイルする可能性があつて」

「どゆこと？」

「……脚の、動かし方って人によつて、というか、骨格によつて違いがあつて」
「骨格？」

「うん。いろんな分類の仕方があると思うけど、とにかく流乃は日本人……というか人類にはとても珍しい、二軸歩行タイプで」

「二軸？」

「右脚と左脚の支点がそれぞれ単独であつて、単独で動いてるような感じ」

「それってあたりまえじゃないの？」

「違うんだ。」

普通は、両脚を使つて歩くもしくは走る時は、骨盤の真ん中を支点にして、骨盤の左右を前後させながら歩く」

「あ、ほんとだ」

腰に手を当ててやってみると、確かにそうである。

「流乃はここ、ここ固定したままサツサツサツと歩けるので、いわばツインエンジン。普通の人がひとつのエンジンの力を複雑なリンク機構で片脚ずつ伝えてるとするなら、二つのエンジンが左右で勝手に動いているので……だからメチャクチャにスピードが出る」

「はー」

「ちなみにウサイン・ボルトなんかもそんな感じかな」

「ほー」

「……自分で知らなかった」

「反面、当然燃費は二倍悪いので、一発ダッシュの後回復に時間がかかる。また、可動方向がほとんど前後だけなので、脚さばきの柔軟性は無い」

「まったくその通りね」

「だからクロスの時、身体まるごと捻らざるを得ないんだ。でも、確かにワンアクションだしその後の選択肢を狭めるんだけど……その身体の癖あったらこそ、『ミラクルズの長槍』は5mぐらい先からグサツと刺せるわけ」

「使いやすい短い槍にして、相手が防ぎやすくなったらしょうがない、と」
「と、僕は思う」

「んー……」

流乃は顎に手を当てて考えて、コーラをぐびつ、と飲む。

「長い槍が使いやすければ、もつといいじゃない？」

「もちろん」

「おつ、積極的やな」

「悔しいのよ。このままじゃ終われない。あつたまぎた」
「珍しい」

流乃はいつも、クールというよりも傍観者のなところがちよつとある。そんな彼女にも久しぶりの負けは堪えた、らしい。

「そういう身体の癖、体癖って、どこで学んだの？」

「いや、自己流。スポーツ医学や整体の本を読んで、適当に分類した」
「ほおお」

「人間の身体がみんな同じって考え方はしちゃいけない。驚くほどみんな違う。性

格がそうであるように」

「脚のほかにも？」

「もちろん。そうだね、たとえば……蘭のタメ癪」

「……タメ癪？」

網の上でトウモロコシを転がしていた蘭が、顔をあげた。

「蘭の物凄いパワーは、ギューツと力をタメる、圧縮してから爆発させることで生まれる。これはとてもわかりやすいし効果も抜群だけど」

「あわかった。」

時間が掛かるのと……読まれる」

「Exactly.」

「いつもエレちゃんに負けるのは、それなのかな」

「まあ、それもある。」

エレは逆にルックスの優しいイメージで凄く得してて、あの子は実はものすごく速くて強い。相手が勝手に侮るんだ」

そういえば、確かに、可憐や胡桃に仕掛けるようなハードタックルをカマした覚えが、あまり無い。

言われてみないとそういう無意識の癖は、わからない。

蘭は、考え込んだ。コーチがフォロー。

「まあただ、蘭は骨格からして日本人離れしてて、もうヘタにその「タメ」を消すことを考えるよりももう思いっきりタメて思いっきり爆発させた方がいいかな、と」

「……」

「おもしろいねー」

「このへんのことを言い出したらキリがないな。ウチも実は股関節はあんまり柔らかくないし」

「え？ そうなの？」

「そうだね。さすがにナナはよくわかってる」

「そらそうでんがな。」

まあその分足首とか膝とか技術とかでなんとかしとるわけやね。

可憐なんかは使い分けられるというか、普段は懐深く柔らかくドリブルも出来る

んやけど」

「シュートの時だけ筋肉をギュツと固めて、パワーを逃がさない感じで撃ってるね」

「そういうのって、誰かに教わるの？」

「いや、カレは自分で意識したんじゃないかな。彼女も自分のことをよくわかってるので、あんまりそういうところでは、言うことが無い」

「他柔らかいのはマキやんとか……まあ、やつぱり、ありすちゃんですねえ」

「そうだね。あの股関節は変態的だ」

「なんかちよつといやらしい」

「いやいや、変な意味じゃなくて」

慌てて手を振る大地。

放置されるホルモン。

「さっきの流乃の例で言うと、骨盤そのものが三つか四つに分かれてるような感じで、左右の脚の支点の位置が上下左右にズレてるような……まさかそんなことは人間の身体上不可能だと思うんだけど。」

だからそういう『いいかんじ』で持ててる時、いいディフェンダーほど手の施しようがないんだ。見たこと無い動きでボールのベクトルが変えられるので、反応のしようがない」

「ああ……そういうことか……何度か『どう考えても理屈に合わない』って抜き方されたことあるんだけど」

「そういう時は……ぶつける」

蘭が静かに口を開いた。

「うん、そう、本能的に『コイツはやバイ』と思つて無理に潰してくれるとFK（フリーキック）が貰えるので」

「じゃあファール狙いでいつも長めに引つ張つてるの？」

はなこの言い草に、わずかに剣が交じる。

「や、それだけじゃない。

そういう体癖があるから、当たつてる時はまさにピンボール・ゲームの反射板み

たいに、どこから来たボールでも自分の好きな方向・速度に一発で変換してくれる。

ウチにはナナや美緒といういいパサーが居て、可憐という素晴らしいフィニッシャーが居る。でも、可憐を直接狙うのは誰でも警戒するので簡単ではない。しかしここに、自由に動いてフリーになつて、もらつたボールを思いがけない角度速度で反射してくれるリフレクターがあれば……これはなかなか、捉えきれない」

「じゃあ、可憐の方をぴつたりマークすればいいじゃない」

「ありすにも決定力あるので、そうすると反射方向を直接ゴールにすればいい」

「でもそれって二択でしょ？」

「二択が、いちばん、悩むんだよ。」

人間

「「うーうーん……」」

ニヤリと笑う大地に、「ごだわりどころ」の解説をはじめて聞いた面々が唸つた。そう言われてみれば、「当たつて」いる時のありすのヤケクソな無双状態が非常に納得できる。相手はいつも、彼女の突進に怯えるように後退する。突進そのものをケアするだけでは足りず、キラーパスが飛ぶことまで見なければならぬ。常にその「二択がある」というポジション・姿勢・ボールの持ち方運び方をしているこ

とが直感で把握できるので、「選択」を迫られ続ける相手は、パニックに陥る。

間違えれば、終わりだからだ。

しかもズルズル後退すればするほど、シュートにしろパスにしろ成功確率が上がる……

天使の顔をした悪魔である。

「……でもそれならそれで、そういう風にしなさい、って教えてあげた方が良くない？」

流乃が腕組みで言う。

「そういう風に言ってしまうと、そういうプレーに『張り付いて』しまう。彼女は左右に張って突破やクロスをやっても、単独ドリブルでも、とにかく『予想もつかない』プレーをするのが最大の特徴なので……それをスポイルしたくないんだ」

「いや、言ってることは、わかるけど……酷だと思う」

「僕だっと思うさ。けども……自分で感じて欲しいんだ。自分の力に」

「んー……サジェスチョンは、ありだと思っただけだ。そうでなきゃ『指導』とか

『教育』の意味、無いじゃない？」

「自分が感じたものを伸ばすお手伝いが、指導だと思う。」

『これをしなさい』と示唆することではない」

「んー……」

「『とっかかり』ってあるわよ、何にでも。コレを軸に考えて、ソレもオプシヨン、アレもあり。そういう考え方は？」

はなが継いだ。

「それには時間が無さすぎる。」

ナナや可憐は一〇数年やつているんだ。そういうやり方でもできるだろう。でも彼女はそうじゃない。キャリア一年にも満たない子にしてはとてよくやつてるよ。

それは、エレーナや明日葉もそうだけど。でも、二人は体の動かし方の基盤みたいなものは既にできてて、そこへサッカーの技術を接木できてるので花が咲くのも早いんだけど……ありすはそれも無いからね。無いからこそ、あんな動きができるんだらうけど」

「うーん……」

「そもそも、今言ったことも今忘れて欲しい。僕も忘れる。」

自分が思いついた、気づいたことをこうやって言葉にしようとしたら、またそれに囚われて、『ありすはこういうプレーヤー』という思い込みでモノを観てしまうから。

あ、流乃も、蘭も、いま言ったことは参考程度にしてくれ。僕が間違ってるかもしれないから」

「ウイ」「……うん」

はなこが眉間の皺を消して、言った。

「……なんだ、コーチ、いろいろ考えてくれてるのね」

「ん？」

「いやもう、自棄を起こして放り出そうとしているのかな、って」

「……自分がやり始めたことだったら、逃げ出すかもしれないけど、これは……『見い出された』ことなので」

「ん？」

「いや、えーつと……まあ、頼りにされてる限りは、やりますよ、っていうこと」

「頼りにしてゐるわよ。」

おかしなものね、去年は居なかつたはずなのに」

「そうそう、もう居ないと全然しまらないね」

「ははっ、そういつてもらえると嬉しいね」

「僕ももう、絵的に大地君抜きのみらくるずは考えられないね」

食材を撮っていた匠がカメラを下ろして、言つた。愛が例える。

「……ハーレムの、王子様？」

「いや。」

サーカスの猛獣使い」

「「なにー！ー！！」」

「あはははは」

「えっ？ なにか、間違つたこと言いました？」

「ちよつと聞いて、この人ね、こないだ服屋さんでふかふかつとしたのたまにいいかなつて着てみたら言うに事欠いて

『ラフレシアみたいで綺麗だね』

とかつて！」

「なんやそれノロケか。

あんたー！ ウチらもノロケるでー！」

「……いけます！ できました！」

「おまたせでございました」

三十六の先導で美緒がお正月の三宝のように捧げ持つ大皿の上に、アルミホイルにくるまれたソレがある。

「ギター！ 主役登場ー！」

「これは大変なものですよ、これは大変なものです……じゃーん」

「「おおつ」「」

ホイルを開くと、こんがり焼けた塊肉。これは人類の、太古の記憶を呼び覚ます。狩りの喜び・火の力・食事の有り難さ。

「見るからにどうしようもなく美味しそうだね……」

「美味しいですよもう焼いてる香りから違うので……」

さく・さく・さくと包丁を入れると火の管理完璧、肉汁が溢れ出すというのではなくそのピンク色なまめかしい断面を顕にする。生っぽいのに十分な火の通りはひと目で感じられ、にじみ出てくる脂がキラキラと灯りに反射して、賽の目に切られてゆくそれはまるで黒曜石に混じるルビー。

「あんまりサシサシって感じじゃないのね」

「それでは種を明かしましょうこれぞD A Bすなわちドライ・エージング・ビーフ日本語で言うと、熟成肉！」

「あなんか聞いたことはある！ 食べたことはない！」

「低温・高湿度で数十日、表面に特殊な菌を繁殖させ風を当てて乾燥させますと内側では組織と水分とが結合して柔らかくなりアミノ酸が豊富になり風味が増し……」

「御託はええから食わせろー！」

「こちらは黒毛和牛にも負けませんその名も土佐あかうし！ 赤身と脂身のバランスのいいこの牛をたっぷり大自然の放牧と粗肥料、つまり草中心でじっくり育て上

げまして都合一〇週間！　ねつとり熟成したものでございますッ！」

「早く早く、美緒早く」

「……はい、取り分けました！」

どうぞめしあがれ！」

「わーい」

「あ、こちら小笠原の火入れ無しの天然塩、これは湯浅の老舗のステーキ醬油、こちらが北海道の西洋わさびでございます、お好みで」

それぞれが奪い合うようにその宝石をチョップスティックでつまみ上げ口に放り込むと……

「「……」」

真に美味しいものを食べる時、人は無言。

「「（にやり）」」

そして勝手に、笑顔になる。

「……美味いッ！」

「なにこのミルフィーユみたいなこの食感。外カリッでも中あくまで柔らかくしかもなんかこう……層と層の間から旨味のジュースが……」

「クリーミーだねえ」

「優しい味なのに深い味なのね。薫りがまた……ナッツ、グラス、いやまるで赤ワイン……」

「おいしいなあ……おいしいなあ……」

「（もぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐ）」

「これはあんたこれはマズいですよこれは」

「いやだからマズく無いんだって」

「……ん。よく、焼けたと、思うんだけど、空堀君どう？」

「百二十点です。店より美味い」

「またまた。……あーよかったホッとした。グラム五〇〇〇とか言うから緊張したよ」

「いい値段だねー」

「熟成にもタイミングがあつて、日曜で最高の状態になる塊をキープしてもらつたので……これはもう責任持つて処分させてもらうしか無い、と。それでもこれ五〇〇で合わせて二万五千だから、高級ステーキハウスとか行くと一人でそのぐらひは取られかねませんよ」

「はー……うまい。しあわせ」

「ひさしぶりにほっぺが落ちたわ。この、こここのことから唾液がだばーと」

「わかるわかる、なんか痛くなるんだよね」

「これなんだかはしやげないね」

「いくらでも食べられそう……」

「でもサイコロ何個かしが無いよね……」

「お肉には白飯派なんやけど、これはこのままいただきますねえ」

じんわり優しい味が、みんなの心もしみじみさせていた。

もちろん一人頭一〇〇gもないので、瞬く間に跡形もなく消えた。

全員が無言で、どうしたらいいのか、立ち止まる。まるでバレーの得意な男性ユニットのCDジャケットのように、それぞれがあさつての方向を向いて立ちすくむ。

こういう時には、おかあさん。

「……さて！ お肉焼きましょう！ おなか、減ったでしょ！」

そう言われれば、そう。

むしろ激しい刺激に、胃が腸が食道が脳が、なにより心が、耐えられない。

「喰うよ！」

「「おおー!!」」

「あーでもなんか今の記憶消去したい！」

「あんた！ これ順番違うてんで！」

「せやから俺は先ホルモン食え言うたやろ！」

そんなこと言いつつもじゅうじゅう焼かれ始めると我先に箸が伸びる。

「……いやいや、これはこれで！」

「うまいうまい、これはまた別の料理！」

「やつぱ白ご飯にカルビにタレ、このジャンク絡みが最高！」

「ちよつと！ こっちの七輪ホルモンと野菜ばつかじやん！ ロースとハラミとカルビと回せー！」

「じゃ赤ソーセージと豚バラと鳥の胸肉としいたけを」

「だからしいたけは要らーん！」

「野菜美味しいぞー。ほらチシャとエゴマの葉とテンジャンも。巻け」

「それやると食える肉の量減るからやらん」

「こうすると胸焼けしないからいつまでも食べられるのに」

「え嘘マジ？」

「キムチとナムルもあるよー」

「キャプテンあれは？ ニンニクをホールでオイルでオイルでグツグツ」

「やる？ みんなにバレルよ」

「オウフ……ホクホクしたいなあ……ホクホク、ホクホク」

「……蘭ちゃん。今日は、おとなしいのね」

愛が尋ねた。いつも焼肉ともなれば皿と網との往復回数はおそらく一番であろう野性派が。

「……うん。あの、ちょっとあんまりにもお肉が美味しかったから……おじさんを、思い出して」

「どなた？」

「お父さんの親友で……」

むかし、子どもの時に、基地祭があつて、連れてつてもらつた時に」

「キチサイ？」

「自衛隊の基地のお祭りやね。蘭ちゃんのお父さん自衛隊員さんやつけ」

「うん。」

その時のイベントで『牛一頭まるさばき』があつて、お父さんとおじさんが中心になつて……」

「ワイルドなイベントだなあ」

「ボク、その頃は気の小さい引つ込み思案な子だったんだけど、お兄ちゃんの影に隠れて観てたんだ。」

牛さん見るの辛いから、お父さんばかり観てた。

お父さん汗だくになつてこーんな大きなナイフというかもう、刀みたいな振り返して、それを福島さんがどんどん焼いて……

みんなで列に並んでその焼いたお肉もらって、食べるんだ。

ボクいやだったんだけど、お兄ちゃんが『おいしいよ』っていうから……無理やり食べると、ほんとに、美味しかった。

ほんとに、今まで食べたお肉どれよりも美味しかったし、いまいただいたこのお肉よりも……おいしかった、かも」

「そういうもんだよねー」

「その時初めて……なんて言えбаいいのかな、『人間は、こうして、生きているんです』って、強烈に、お父さんと、おじさんに教わった気がするよ」

「いい教育ですなあ」

「それから食べ物好き嫌いしなくなつて、なんでも食べるようになって、必要以上におつきくなつちやつたんだけど。

それちよつと、思い出して」

「いい話じゃない。なんでそんなしんみり」

「……おじさん、ついこないだ亡くなつたんだ」

「「ああー……」」

「それは、ご愁傷様です」

「……蘭、そんなこと言つてて戦場行けるの？ 毎日友達が死ぬのよ？」

「おはな」

「それで」

はなこらしいキツイ冗談めかした励ましに、蘭が顔を上げた。

「ボク、それには耐えられないな、って。

この中の、もし誰か一人でも……死んだら。

ボク、耐えられない」

「……」

沈黙が支配した。炭火の爆ぜる音と、食材の焼ける音が、夜に響く。

愛が、そつと蘭の右手を、握ってあげた。ハンカチを目に当ててあげる。みんなはそれを、見ていた。

「……そう思うと、ボクにはお父さんみたいに自衛隊は無理だなあ、って思っで、ぽかーんと、なんだか穴が開いちゃって……」

ごめん！

楽しいご飯の時に、こんな」

「いや。蘭……ごめん」

「はなちゃん謝らないで、ボクが勝手に考えこんでることだから」

「……えーつと天満さん。」

僕が言ってもなんの説得力も無いんですが……普通、僕らは、そういう夢みたいなものが、ありません」

こういう時こそ空堀三十六。

言葉は、つまり文学は、こういう時の、ためにある。

「まもちろん、『全国行きたい』とか『次勝ちたい』とか、そういう目標はあります。」

でも、『なんのために生きる』とか、そういうことは、考えないようにして生きているもんです。中には、こないだまでの天満さんみたいに、生き方決めてる偉い人も居ますけど」

「ウチかてそやで！」

「うんうん。」

でもたぶんこの中で、ハッキリそういうことを考えて、実際に行動としてその…
夢、に向かつて動いているのは、たぶん、ナナ一人です。あいや匠もか」

「動いてるけど、夢は銀河の彼方だよ」

夜空に向けて、空砲を撃つ。

「ん。あとはボンヤリこんな感じかな、ぐらいいはあっても、特になにもしてません。
サッカーやって友達と遊んで学校の勉強して、肉喰ってるだけですつまり……」

につこり、笑った。三十六には珍しい、普通にいい笑顔だった。

「……みんないつしよ、つてことで」

「そそそ。あたし、なーんもなし！」

「無さそうやな、るーはなー」

「その場その場でテキストに流れに乗ればいいのよ。や、そーした方がいーように
流れるもん、なの」

流乃、いつものニヤリ笑いをしつつ。

「そう……なの、かな」

「だってあたしがサッカーやってんのよ？ わけわかんないじゃん！ ぜんぜん向いてもないし好きでもないし」

「今日は告白が多いなあ！」

「けど……楽しい。」

これみんなに誘われたから『やってみるかな』って流れに乗っただけ。

なのにこんな……こんな楽しい時間に、出遭えてる。それでいいと思う」

「あたしはさすがに軸あつた方がいいと思うけど」

「あんた軸好きやな」

「……といって私もじゃあファッションの何やってるかって、雑誌見てお店回ってるだけ。そんなもんよ」

はなこも笑う。

「私お料理のことが何かしたいんだけど……料理研究家なのか、料理人なのか、そ

れすらわからないよ」

美緒に続いて、愛が握った手を上下に揺すつて、言った。

「……私、もつとわからない。

自分が何をしたいのかも、自分に何が出来るのかも」

愛の美貌は金になる。

が、するかどうかはまた別問題だ。

「だから……同じ」

みんな同じだ。

ナナだつて現役が終われば同じことが起きる。だからたぶんそれは一生、そしてみんな、そう。

「……みんな。

……ありがとう」

「蘭。」

大地に注目が集まった。

猛獣使イヤ、王子様がなにかきつと華麗なキメのセリフを……

「……肉、食べてくれ。」

とても追いつかない」

「「だー……」」

別の種類の、笑顔になる。

「よし喰おう！」

「「おー!!」」

「キャプテン白米のお櫃をー！ お櫃をー！」

「ふっふっふ今！ 七輪鍋炊き白米を！」

「よっしやあああああ！」

「キャンプテンあれ、半分炒めてガーリックライス！」

「やる？ バレるよ？」

「……バレてもいつかー！」

「「おーー!!」」

ともだち、つてありがたい。

蘭は目から溢れる水分を隠すように、肉野菜がてんこ盛られた深皿に、顔を突っ込んだ。

勇気をくれる。希望をくれる。立ちすくむボクの手を、握ってくれる。だからボクも、同じように、誰かを、守りたい。

父を敬い兄に憧れそして「デیفエンダー」をやっているのは。守る人、だから。

その北極星の輝きは、いささかも曇っていないかった。

■レスキュー

——家に帰ると、薄暗いリビングで兄が独り、TVを観ていた。父と母は、不祝儀に出かけている。私も、と言ったが父が「泣き顔をもう見せたくない」と断られた。

「……ただいま」

ソファの後ろから、肩越しに覗きこむ。

「ん。おかえり」

画面には、緊迫したヘリコプターの機内。

「……これなに？」

「ドクターヘリ。救急医療チームの特番」

「へーっ」

「蘭、ご飯は？」

「お腹いっぱい食べ過ぎたよ。もう動けない。……よっ」

「おいおい」

ソファを乗り越えて、兄の横に座る。ちよつと甘えて、膝枕で寝そべる。そのままにしてくれる、優しい兄。

へりは重病人を載せ、病院に舞い降りる。まるで戦場のような緊急医療チーム全員の、必死の救命作業。血飛沫が噴き出て、ハサミがメスが電気ショックが輸血が点滴が注射が飛び交う。

「……大変だね……」

「うん。文字通り一秒を争うからね……トロい僕には、無理かなあ……」

「お兄ちゃん、救急医になりたかったの？」

「ははっ、アメリカのドラマ観てちよつと憧れたんだけど、これは無理だね」

「ファイター向きだよね」

「あはは、そうだね。ピンチでアドレナリンが噴き出るタイプでないと」

画面は変わって、今度は列車の脱線事故現場になる。路上に放り出された様々な怪我人の間を走り回る救急チーム。患者に色のついたタグをつけている。

「……あれは、なにをしているの？」

「トリアージ。優先順位付け。黒は助からない、赤は重傷、黄色はその次に重い、緑はとりあえず大丈夫。赤、黄、緑の順で病院に搬送する」

「じゃあ黒の人は放っておくのか？」

「うん。救急車の台数や搬送できる病院の数は限られてるわけだから、救える命から運ばなきゃならない。」

全ての命を差別せず救う、という医療の理念からはかけ離れた、緊急例外措置だよ。元々野戦病院とかで発達した考え方なんだ」

「……これもお兄ちゃんには、無理かも」

「あはは。そうだなあ……荷が重いな」

「……お兄ちゃん。」

お兄ちゃんは、小児科とかがいいよ」

「あは、そうかな……うん、小児科かあ。考えたこともなかったけど」

「ちっちゃい時、いつもお兄ちゃんに守ってもらったもの。」

子どもの命は、何よりだいじだよ」

「……そうだね」

言いながら蘭の目は、画面に釘付けになっていた。オレンジ色の服を着、ヘルメットを被った屈強な男達が、闊達たる動きで大災害の被災地を駆ける。さまざまな機材を駆使しつつ、自ら瓦礫の中に飛び込んでゆく。この男達こそ。テロップを思わず読む。

「ハイパーレスキュー……」

「ああ、東京消防庁の消防救助機動部隊だね。難易度の高い救助活動を受け持つ、レスキューの中のレスキュー、選びぬかれたトップエリート達だよ。海外にも派遣されるんだ」

「……」

荒天に翻弄される小さな漁船の乗組員を救うため、ヘリから降下する。崩落したトンネルから生存者を救うため巨大な岩盤に挑みかかる。そして画面は海外の地震震災現場。

「……これは〇八年の四川大地震かな。力及ばず助け出せなかったご遺体に、手を

合わせて黙祷を捧げる姿が、現地の人々の心を打ったエピソードだね」

「……お兄ちゃん」

「ん？」

「……これって、女の人も、居るの？」

「あー……どうだろう、見たことないけど……居ないなら能力的なものなのか、規定で決まってるのかどうか……あとで調べてみようか」

「うん」

豊は重い膝の上を見る。

食い入るように、画面を観ている。ハードな訓練で、垂直の壁をフリークライミングのようにバリバリ登っていく隊員達。乗り越える壁は、いつも目の前にある。

「……蘭」

「うん？」

「夕食は焼肉？」

「……あ！ あ、あ、カラちゃんの持つてきてくれた鶴橋のキムチがめちやくちや美味しくて……歯、磨いてくるー！」

勢いよく跳ね起きて洗面所に向かう妹に、忍び笑いをした。
妹にはきつと、オレンジの作業服が似合うだろう。
少なくとも、迷彩服よりは。

■スイッチ

——練習は日に日に激しさを増す。

極秘焼肉パーティーで一ヶ月分の脂分を補給しツヤツヤお肌を手に入れた二年生、野獣の（家畜だけど）パワーで圧倒してやると意気込んでみれば、なにやら一年生も三年生も負けじとパワーアップしていた。一年生はしなやかにまるで水を得た魚、三年生はテンション高くまるで高い血糖値を消化するかのよう。

紅白戦の組み合わせも今までにないパターンを繰り返し、アドリブで連携できる柔軟性を養う。

総仕上げの一戦が、終わった。

「……コーチ！ スタメン発表は！」

「……いや。今晚一晚、悩む」

「うう……胃が痛え」

「ちー、心配すな。あんたが一番心配要らん」

「なに言ってんスカナナさん、ここであう、『あたし出ますよね!』という積極性で最後、最後こうキュキュツと「I」を消して「20」を書くんですつ!」

「G Kは落ちついてる方がいーんじゃないの?」

「い?」

クスクス笑いが漏れた。だいぶ、いい方にも戻ってきた。

「ということで今晚は頭の中サッカーで一杯にして寝てください。

他、なにか」

「ウイ!

……最後シュート練習、やらない?」

「「おー」」

流乃の提案など珍しいどころの騒ぎではない。あしたはなんだ、ハンバーグが降ってくるのか。

「OK、じゃあ最後にパーッと景気づけるか。

いつもどおり組みはそれぞれ見つけよう。僕が蹴ります！」

「「はいつ!!」」

自然、前回と同じ組み合わせになった。今日は、勝つ。メラメラと噴き出すオーラが見えるようだ。

ホイッスル一吹き、レディ、大地の前方パスでゴー、二人がダッシュしてそれを奪い合う。

先頭はこれも前回と同じ、可憐ヴァーサス流乃。

これも前のように一歩先追いついた流乃が、これは珍しい、ステップ合わせずそのまま右脚を振り抜く。

「「おおっ」」

しかし力弱い。忍様なんなく止める。

流乃が右脚を使うなんてなんだ、あしたはスパゲティが降るのか。

「「もう一回!!」」

流乃と可憐が同時に叫んだ。

闘志むき出しの争いが続いた。最終8組目は、エレナと、蘭。

ピッ……シュッ――

ダッ！　だつ

蘭のスタートが速い！　やることがわかつているとはいえ、予備動作の大きさという欠点をよく消していた。

だがエレナがぐんぐん追いかけて追い抜く。腕の振りが前より明らかに大きく、加速がいい。

先に触れる、ポン、と自分側に引き寄せてそのまま左脚一閃。

びゅーーーん、と美しい弧を描いてサイドネットゴール・イン。

「「おーっ！」」

歓声が沸いた。その軌跡の美しき、無駄のないトラップからの絵に描いたような

ミドルシュートに。転げた千里が跳ね起きて悔しがる。

すごい、エレーナ。

これで追いつきもしないなんて。

自分が進歩したと思っても、周りがそれより進んでいれば、むしろ後ろへ下がってる。

まして立ち止まっていたら……

身体の内側に、なんだか塊みたいなのが、浮き上がってきた。そいつに、叫ばせる。

「もう一回ッ!!」

「ハイ!」

——何回となくそれは続いた。冬の早い陽はとうに落ちてグラウンドを照明が照らす。一心不乱、夢中、ゾーン……童心に還って、ただ、ボールを追って、蹴った。相方より早く。

相方に、勝つ。

またもエレーナと蘭のコンビに回った。片方が全て勝ってる組は、ここだけである。

大地は少し考えて、腕組みをした。
まさか鼯鼠はできないが……よし。

腕組みのまま、予備動作無しホイッスル無しに、いきなり蹴った。
すいーっ……と柔らかいロビングが前方に飛ぶ。

蘭が弾けるように出た。エレは虚を突かれて、一瞬、遅れる。

だがそのロビングはバウンドの跳ね足が長く、加速するようにゴールに向かう。
距離が長くなるほど、エレーナがぐんぐん追い上げて……

また右脚で掻き寄せようとした、その瞬間。

「だああっ!!」

身体ごと、頭からそのボールに突っ込む蘭。地上十数センチのボールに、ダイビ

ング・ヘッド。

「「ああつ!!」」

悲鳴が上がった。エレの蹴り足は引つ込みが付かない。顔面に蹴りが入る。……が、ギリッギリ、その足首はボールだけを掻き出し、エレはそれを左脚で、ゆっくりゴールに蹴った。千里が胸で、抱え込む。

「大丈夫デスカ」

「ん。なにもないよ」

エレーナに引つ張られて、起き上がった。

これでも、無理か……

「らーん、無茶すんなー!!」

ナナがマジ声で野次を飛ばす。それに片手を挙げて応える。

「エレちゃん……も一回」

「……はいっ！」

それを観ていた大地が、長い笛を吹いた。

ピーーーーーッ……

「今日はここまで！」

もう一回だけ、と言おうとしたその機先を制される。ボクを見て、コーチが言う。

「……負けが多かった者は、その悔しさ、タメておくこと。

試合で爆発させろ」

ホウ、と一息ついて、胸いっぱい、その「悔しさ」を吸い込んだ。

——大地はまた、今夜はリビングのテーブルに座って、フォーメーション図を弄り回していた。

灯りは点けない。なんとなくこの広い空間に独りだともつたない気がして、夜は常夜灯やデスクスタンドで過ごすことが多い。

父が——彼も今はサッカー・コーチ職だが——「コーチみたいなことをやる」と言った時に一言だけ、くれたアドバイスがある。

「考え事は、机に座ってやれよ」

それだけだった。裏を返せば、布団やベッドの中で悶々とするな、と。それを今更ながらに思い出した。

それは、真剣さを表現する「礼儀」みたいなものかと思っていたけど、いや、物理的にも、人間の脳は血流が上下に入ってちゃんと働くように、左右に入るとどう

しても眠くなる。

そういう朦朧とした時に思いついたものは、その時はいいアイデアに思えても、起き上がってみればまず間違いなく、疑問符が付く。

人間は二足歩行動物であり、それを武器にして進化した。

……結局のところ、メンバーはいつもどおりになった。

G K、忍。

D F、右から明日葉、蘭、もも、流乃。

M F、低め中央、美緒とエレーナ、高め右・ナナ、高め左・ありす。

F W、胡桃、可憐。

この数ヶ月、数多くの試合を通じて様々なチャレンジを繰り返してきた。その結果導き出されたのが前戦でも先発したこの一人であり、一週間で大幅に変わるものではない。

強いて違いをあげれば、意見交換会と流乃とはなこのツツコミも加味して、ありすをトップ下中央から、左サイドに出したことぐらいだ。

「左から突破しなさい、流乃と一緒に切り崩しなさい」

のメッセージを「とつかかり」にしてもらえれば。確かに、

「好きなものを描いていいのよ」

という課題が一番の難題であり、

「お花を描きましょう」

の方がまだなんとかなる。

……それでもまだ、そうすると「花しか描かない」というマイナスが引つかかるのだが……

「……まあこれで、力押せば」

三十六と古都が集めてくれたデータにまた目を落とす。

相手チームは前年度、ミラクルズとは逆山で準決・三決と連敗し、地区代表を逃している。

「目標を間近にして二連敗」は、精神的にかなり堪える。それも三決はスコアレスドローから延長、そしてPK戦までもつれ込んで涙を飲んでいる。

今年もまた、準決で敗れた。この三決に賭ける意気込みたるや、おそらく我々よ

りも、上だろう。

『……しかし、その分、恐れもある』

「またか」という。

その「またか」の気分を起こすにはやはり先制点だろう。……まあ、先制点はいつだって欲しいものだしいつだって獲れば有利になるものなのだが。

ただ引つかかるのは、あまりに準決のチームと似ていることだ。守備が得意な堅守速攻型、タレントは居ないが全員が汗を掻いて諦めないしぶとい戦い……これではこちらに「またか」が先に起きそうだ。

もしそれが起きた時に、どうすればいい？

……それと、欲もある。

そう、ここでゴリ押しでまた可憐やナナの個人技で無理勝ちすることはたぶん、できる。ただそれではもう、本戦で通用しない。

日本代表がアジアでは無敵を誇っても、ワールドカップ本戦ではとたんに苦戦を繰り返すように。

「自分たちのサッカー」

という言葉は非常に甘い囁きであり、アルコール度数が高くてとても簡単に酔っ払える。

負けてなお。

『……負けるわけにはいかん』

すくなくとも次は、できれば、その次も。

となると、目の前の一勝に最適化しすぎない方がいい。「あそび」というか、余裕の部分、何かが起きた時に変化あるいは進化を起こせる、その部分があつた方が……

贅沢すぎる話だろうか。

余裕を持ちすぎている甘えた話だろうか。

いや……

もがくように鉛筆を動かして、くちやくちやと線や矢印を描いている。紙が頭のなかを表すように、黒くグチャグチャになつてきた。

「……コーヒー淹れるかな」

立つて、照明を点けた。

パチツ、という軽い音とともに、視界が、世界が変わる。思考の魑魅魍魎が霧散して、懐かしくも当たり前の、いつもの部屋。

パチン。

消すと、夜の帳に支配される、別の空間。自由と無秩序、時間や空間の感覚が薄れていく。

パチン。

またいつもの、秩序と日常の支配する、日の当たる日々。

人間だつてそうだ、親友や先輩を酷評する可憐、怒鳴り声をあげるありす、蘭の顔を蹴つ飛ばしかけるエレーナ。弱みを曝け出す流乃、食材に恐れをなす美緒、知

人の死に涙する、蘭。

夜と昼があつて、人間だ。

もし、僕らに足りないものがあるとするなら……それか。

とにかく一辺倒なんだ、いつでも。攻めるなら攻めまくる守るなら守り倒す。サッカーはそうじゃない、攻めと守りが一点一瞬で切り替わり、であるがゆえに攻めは守りであり守りは攻めである。

いやわかつてる、だからこそ美緒をボランチにコンバートして、その「ハンドル」を任せたわけで……任せる？ 任せただけでいいのか？

それは、僕も、やらなければならぬだろう。当然。

コーチという欧州風の呼び名に囚われすぎてた。教えるだけじゃない、僕は指揮官でもある。

「みんなを勝たせる」んじゃない、

「僕が勝つ」んだ。

「……スイッチだ」

パチン！

集中モードにするためにもう一度消した。

『今日はきっかけがありませんでしたね』

「きっかけ」は、そこらに転がってるものでも、空から降ってくるものでもない。自分ででっち上げるものだ。

動悸高鳴る胸を抑えつつ、浮かびかけるアイデアの糸を辿りゆく。もし今回その「スイッチ」を、僕が自由になるスイッチを、仕込むとするなら……

目に飛び込む、デイフェンスラインの「3」の文字。

無論、これだ。

丁寧に消しゴムで消して、一瞬考えて、「16」に書き直す。リザーブの「16」を消して、「3」を丁寧に書いた。

「……やってみよう」

……初めてじゃないかな、こんなにハッキリ意識して「作戦」を仕込むのは。

いままでは、状況や相手に応じた自分達の最高を探したり組み合わせたりするの
に必死だった。場当たりと偶然で、なんとかしてきた。

ひとつ、ステージが上がった気がする。

もちろん、勝てれば、だが。

胸の高鳴りが止まらない。

これが、決まれば、そりゃたまらないだろう。

「監督」つてヤツはどんなものでも男子一生の仕事と言われる。

それがいまなら、わかる。

勝てれば。

あしたが待ち遠しい、と思った。

チームを率いてからおそらく初めての、ことだった。

いままでは重圧と不安で息苦しいばかりだった。勝つても一息つくだけで、もう
その夜には次の息苦しさに襲われていたりした。

でも今夜は違う。

子どもの頃、サッカーを始めて、最初の試合の前の夜の、ようだった。

■声援

——勝負が始まる。

おそらくミラクルズにとっては、もし行けたとしても本戦決勝にもまざる、「こ
こ一番」である。

これを勝つために、一年やってきた。

客席には前戦に増すサポーターが詰めかける。いや、前戦で「まあ軽く勝って決
めるだろう」と目を離れた人々が、軽い自責の念も胸に秘めつつ続々集った。

「ナナちゃん！ ナナちゃん！」

「おう、がんばるでー！」

舞ちゃんの可愛い声援に拳を握る。

「おはなちゃん！ 着こなしてるわよ！」

「ははっ、ママ、まかせて」

実の母親のように心配するママさんと、それに応える弟子。

「ユミちゃん、今晚凄いから。楽しみにしてな！」

「ありがとうございます。楽しませます」

日曜に店閉めて来た『タベルナ』のシェフに、ガードグラスを下げてご挨拶。

「マーキさあああん!! マーキさあああん！」

悪ガキ達の大声に、背中越しに高く挙げた右手を振る褐色の女神。

「愛ー。来たよー。舞台、期待してるからね！」

「（コクリ）」

寧々子の声に大きく頷くプリンセス。

「サワちゃ~~~~ん!!」

「あは、もも、みんな……」

頑張れ~~~~ッ!」

栄、スタンド最上段でこっそり見ようと思っていたのにももに見つかった。しょうがなく大声を出す。

忍が見上げて微笑む先には、両親が居た。今日も父は和装、母はゴスロリ寸前の娘衣装。ファンだけじゃなくこうして、関係者も。

「蘭!!」

「お父さん……」

まさか来てくれるとは、思わなかった。わずかな休暇はゆつくりしてもらいたかったから、直接言わなかったのに……ただならぬ様子を察知して、お母さんが伝

えてくれたのだろう。

笑顔に良心の呵責、こんな時に限って、ベンチ。

「……ありがとう。せっかく来てくれたけど、出番、あるかどうか分からないよ」

「ぶわっかもおおおん!!」

「わ」

「いいか蘭、予備兵力も大事な大事な戦力だ。ピンチの時チャンスの時、ここぞという時に投入して勝敗を決する、まさに切り札だぞ!」

冗談めかしてはいたが、現場の軍人らしい実感が、こもっていた。

「……ありがとう。ボクも、戦う」

「あたりまえだ!」

「父さん、蘭、おつかないよ」

「お兄ちゃん!」

飲み物を二つ手にした豊が観客を掻き分けて来た。

「……蘭、すごいね」

「うん」

「がんばって」

「……うん！」

「応援が力になる」。

それは、本当に真剣勝負の場でされた経験がある者でなければ、わからないだろう。

上町大地は、ピッチ際に立つて腕組みをしている。身体をほぐす両軍の選手を見るときもなく見て、表情から内心は窺い知れない。

「……今日は円陣は、組まないんですか」

「ん。やめとこう。」

あれも『誰かが』って依存を生みかねん。今日は、それぞれが、勝手に、がんばる」

「はい」

古都、納得。

ひとつひとつのディテールまでひとつひとつ理由がある。

もちろん二年越しの雪辱を期す相手側のベンチも、それからサポーター席も負けない盛り上がりを見せていた。

今日のユニは、ミラクルズはもちろんピンク・白・白のお馴染みホームユニ、相手のそれも鮮やかな緑・緑・緑で、まるで生い茂る草原に咲く花のよう。さあこの風景の主役はどちらか。

感情の渦が、スタジアム上空で、巻いていた。

ピッチの選手たちのテンションが高まるに連れて、それは逆に徐々に静まってくる。しかしもちろん、消えてなくなるわけではない。

観客それぞれの内側にタメこまれていく。

そしてそれは主審の笛とともに解放され、さつきよりもはるかに大きな、激しい渦を巻き始めた。

■2ストップ作戦

「期待通り予想を裏切れ」

などという言葉がある。商品開発や芸術家に対しても使われる、無責任な放言だ。

しかしこの試合の、敵軍の指揮官にすればこの言葉が今の気持ちにピッタリだっただろう。

「絶対に出場権を取る」

そのモチベーションは彼女たちの速い出足に、強い当たりに、生真面目なボールチェイスに、これ以上ないほど表現されていた。

調子がいい。いける。

指揮官はあたためていた「対ミラクルズ対策」の採用を決める。

相手に追い風はこちらに逆風。

ミラクルズ、相手が堅守型であるのをいいことに、「カウンター警戒」という名

目でリスクを負わない、負わな過ぎる。

特に両サイドバックが上がらないので、サイドに張らせた二人の攻撃的MF、ナナとありすが孤立気味。相手も同じ4―4―2でDF・MFラインが二列に並ぶシステムなので、サイドバックと攻撃的MFで挟まれて容易にボールを奪われる。

もちろんそれを深いところで当のサイドバック、右・明日葉と左・流乃が待ち受けてはいるので、深刻なことにはならないのだが……

まあしかし序盤は、両軍しようがない。とにかく今日は、「負けたくない」のだ。先制点を奪う挑戦心より、獲られる恐れが先んずる。

「……オフエンシブ二人がボール持つてからサポートが遠い。ウチの弱点」

はなこがペンのおしりを噛みながら言った。

「ありすがいつもどおりトップ下だと、もうちょつとなんとかなると思うんだけど」

「……」

しかし大地は動かない。

彼にとつては「期待外れで予想通り」、それ自体も想定内。

「……典型的な『ミラクルズ潰し』ですね」
「ん」

古都の言葉には頷いた。

「自分達の長所を伸ばす」のではなく、「ミラクルズを潰す」ならどうすればいいか。

答えは簡単、前戦で相手のやったやり方だ。

攻撃のキッカケを与えない。すなわち、司令塔ナナ（やそれに類するプレーヤー）を孤立させ、FWにボールを供給させない。焦れたミラクルズがリスクを負って前に出てきたところで、人手を掛けて一斉に襲いかかって、点をもぎ取る。

ただ、これには対応策が無くはない。

時間が押してくれば守備を一枚削ってマキを入れ、流乃を上げ、両翼から胡桃め

がけてバッコンバッコン放り込めば、さすがにナナが空いてくる。そこからナナ↓可憐のホットラインに期待する。

あるいは、単純にありすかナナがペナルティエリア近辺で単独突破をゴリゴリ仕掛けるのもいい。ファールを貰ってFKが取れば、ミラクルズにはいいキッカーが近距離長距離技巧派パワー派右左と揃っているので……

今まさにありますが、左サイド奥でゴロゴロと転がされて……ファールなし。

「……笛吹いてくれませんか」

「転がり方が派手なのがシミュレーションっぽく見えちゃうのかしら」

「あー、気合い入ってるのが裏目だなあ」

今日は前回と違いボールを持てば果敢に斬りこんでいた。が、それも良し悪し、ゴール方向一本調子になりがちで、これがありすの良さかと言えば、疑問。

ならば、とばかりに今度はナナが早めに、自陣遠目からクロスを入れた。アーリークロス、目標はもちろん胡桃。

さつ、とCBが二人で挟み込んで自由を奪い、ヘディングシュートはおろか、お出迎えもままならない。

「やるう」

「まあこのレベルになると単純なクロスが入る方が珍しいわね」

こうなると美緒とエレナのセントラルハーフ・コンビは自重、縦へのダイナミズムも攻撃的MFへのサポート業務も薄めになる。

それもいつもなら美緒が守備重点、エレが攻撃サポート重点と役割があるのだが、今日は横並びなので譲り合い。

まあつまり、いつもと少し、変えたところが、仇になっている。

「……しかしこれ、攻撃どうするんでしょう？」

「さあ……あれじゃない、18番におまかせ」

相手2トップの一人が、甲斐甲斐しく走り回っている。

「よく走りますねー。マラソンランナーみたい」

「飛ばしてるわね」

「ちよつと走り過ぎじゃないッスか？」

千里が目を細めて睨む。

キック&ラッシュ時はもとより、守備でもボールを保持したもも、ユミ姉のCBコンビに激しくプレッシャーに行く。

ユミ姉にはフィード力は無いのでボールを回収するとももに渡す。と、そこを狙い撃つかのように襲ってくる。

もももそこは手練のセンターバック、慌てることなく味方に繋ぐのだが、繰り返されるとどこかでミスがあるかもしれないし、確実なショートパス中心になるので、一発大展開が減る。

それもまた、攻撃のワンパターン化を呼んでいた。

こんなにガリガリ突っ込んで来るとは思わなかった。カウンター・チームならFWの脚は消耗品である、ここぞの時に置いておかないと……

しかしこんなFWが居るなら、CBもう片方ははなこにしておいた方がよかったか。フィードの自由が……

「こんなFWが居るなら、CB片方は私の方がよかつたんじゃない？ フィードの自由度からして」

「こんなFWだからこそ、ユミ姉のスタミナが物を言う」

「ああ言えばこう言う」

もちろんはなこも真面目には取り合わない。

手の内を探り合う神経戦は、ジリジリと時間を消費した。前半三〇分。

「……あつ！ FW換えます！ 18番！」

「やつぱり！ あんなんじやどう考えても九〇分無理よ」

「……」

「「……まさか」」

「はい？」

「……三〇分毎に三人使うつもりじゃないかな。二枚交代カード使って」

「えっ、どういうことです」

「あれデیفエンダーじゃないか、つてこと」

「えーっ」

そう言われてみればあの狂ったようなチェイシングに辻褄が合う。攻撃的MFを封殺するだけでは飽きたらず、DFや守備的MFからの長いパスも封じる役目。その専任者。

「『2ストップ作戦』か……F1みたいだな」

「えっ、なんですそれ」

「タイヤの摩耗を気にせず思い切り飛ばして、減ったら交換してまた飛ばす。ピットインのロスよりそうやって飛ばした方が速い計算になる」

「んなバカな。これサツカーよ」

自分で言つて馬鹿馬鹿しいが、たぶんもう一人、使ってくるだろう。

「じゃ攻撃はあの2トップのもう片方、10番だけですか」

「そうかな、まあ、走ってる方もそこそこFW適正ある選手なんだろうけど」
「そこまでして……勝ちたいですか」

「いや正確に言うと、そこまでして負けたくない、んだろう」

「負けないだけでは勝てません！

第一、このチーム去年だってドロドロの守り合いで負けたんでしょ!？」

「呪縛ね。」

あるやり方で傷めつけられると、自分も人にそうしてしまう」

「ハラスメントは連鎖するらしいね。」

虐待とか、DVとか」

物騒な話になった。

代わって入った23番は、「これぞ私の仕事」とばかりに必要な以上に走り回っている。実効性もあるだろうがそれ以上に……鬱陶しい。

と言つて、これに真正面から対策するのは相手のペース。「荒らしは放置」が基本。

大地は立ち上がって、ピッチサイドに歩み寄った。

交代選手にも個性があつて、はなこのように鳥の目で試合を見続けて、ピッチの人間に気づかないことを見つけ自分が出た時にそれをピッチに吹き込むタイプも居れば、千里やマキのようにサポーターになつて心の底から声援を送るタイプも居る。愛のように自分がピッチに立つてると想像して脳内シミュレーションを重ねるタイプも居る。

コーチはどうするかというところ……もちろん、全部。大地の場合うろろしたり古都と話したりして、切り替える。

さて今日はそれにもう一人。

この人はいわずもがな、「タメて」いるのだろう。

「3」の描かれた大きな背中を丸め、口元のあたりで組んだ手の上から、意志強き太い眉の下から、大きな双眸が、爛々と戦いを見つめていた。

■「またか」

——ハーフタイム、修正指示は「距離感が悪いのもう少しお互い助け合って」だけ。それから一応、敵の「2ストップ作戦」にも言及した。落ち着いて対応するように。

型にはめてくる相手に囚われるな。
呪縛を跳ね返せ。

しかし呪縛の力は強い。

人間関係なら「逃げる」という最後の手段がある。だが勝負事ではそうもいかない。そういう気持ちを持ったが最後、相手に付け込まれてストーカーされることになる。

重苦しい時間が、続く。

最初は賑やかだった両軍サポーターも、その「覆い尽くそうとする緑」「弾き返

そうとするピンク」の絵を固唾を呑んで見守っている。絡め固めれば緑の勝ち、逃れ咲き誇ればピンクの勝ち。

ギリギリした時間が過ぎ、後半二三分。

相手監督がカードを切った。もちろん替えるのは23番、今度はおつ、9番。これがエースFWだろう。

フレッシュな彼女は、最初のプレーから飛ばす。なるほど出足も身体のキレ、それから気迫も前任二人より一枚上手だった。

「……これ最初から使えばいいのに」

「我慢する方が難しいですよね」

チームスポーツは「いい選手から使う」のが絶対のセオリーだ。だが時には、相手に合わせてそれを崩す勇氣を持つのも作戦の一つではある。

そして勇氣は、幸運を呼び寄せる。

「……あ！」

ピッ！

ファールの笛が鳴った。ももに激しいスライディングを仕掛けボールを奪った9番を、横から突っ込んだユミ姉が止めた。転んだ。こちらからはボールに行ったように見えたが……

ひとつめの不運。

遠いFKになる。

相手陣は三人だけ残して六人がゴール前に集う。蹴るのはさつき入ったばかりの9番。疲れなし、おそらくキックは正確。だがこの距離、よほどの魔球が来ない限り忍なら大丈夫。

蹴った。

直接狙った。

いい速さとゆるい軌道が、右ゴールポストを直撃した。ゴール左手方向へ弾き返される。

これは幸運。

だがそこに、敵センターバックが居た。「こぼれ球に詰める」ことを忠実に رفت

た、ただひとりの相手選手だった。

これがふたつめの不運。

足元は巧くないのだろう。バタバタした。忍にはそれで、読めなくなった。

これが最後の不運で——蹴るといか転がすというか、とにもかくにもボールはゆつくりと地を進み——タイミングを完全に外された忍の指先を、くぐり抜けた。

1点。

途端、歓喜が爆発した。

ゴールを決めた選手が涙を溢れさせ両手を広げ絶叫してベンチに向かう。それを追う仲間達、迎え入れる選手たち、そして監督。みんな、泣きじゃくっていた。

『……泣かんでも。』

大地は横目でチラリ、見て、鉛を呑んだような気分になった。いや呑んだことはないが。

まだ後半半分ある、これで勝った気になるのは、いくらなんでも甘い。

しかし、冷静な指揮官とは裏腹に、ベンチには火が点く。

「コーチ！ 私入れて！ ケツ叩いてくる！」

「いや、ケツはキャプテンが叩いてくれる」

「じゃアタシ！ ガツガツやってくる！」

「まだ守備一枚削るには早い」

はなことマキの提案を却下して、黙って挙手する愛に、

「……センターF W入れるならもうちょっと先かな」

と告げた。

千里は忍を絶叫で励まし、もう一人はジツと姿勢を崩さない。

深刻なのは観客席である。悲鳴や嘆息ではなく、巻き起こるマズい渦は、諦観。

「またか」である。

『こんな事故みたいな点が入るなんて、今日は運が無いんじゃないか』

『なんでこの程度の敵、いつもみたいに簡単に粉砕できんだ』

『前と同じやられ方をして、学習能力はないのか』

かーれんのゴールが見た・いい
燃えろ此・花・可憐ー！

♪くーるみのゴールが見たーいいー 見たーいいー……

チャントに乗せモヤモヤはとりあえず抑えこまれた。けど消えたわけではない。

それを感じてプロデューサー、空堀三十六は思った。

『歌が欲しい』

イングランドの名門・リヴァプールの応援歌、『You'll Never Walk Alone』の
ような、ピンチでみんなを励ます歌が。自分が励まされる歌を。

ひとつになれる「キツカケ」が無いから、夢中になれる「キツカケ」が無いから、
心に惑いが生じるんだ。

『……作ろう』

勝ったら。

いや……どうなったとしても。

ようやく、観客席から今日始めて、追い風を感じた。

まったく、ウチは選手もサポも、ここまで追い詰められないと力が出ないのか。大地、自分のことを豪快に棚上げして、タイミングを伺う。

作戦は何もそちらだけが仕込んでいるものではない。

数分が過ぎた。後半三〇分、残り一五分。振り返る。いつになく大声を出す。

「全員アップ開始！」

「「ハイッ!!」」

五人がまるで爆発物に吹き飛ばされたかのように立ち上がって、走り出した。

■ディフェンダー

——しかし「またか」のうねりは止まらない。

もう必死も必死、これが二年分の恨みつらみとばかりに渾身のチャージを仕掛ける相手に、こちらもついついカッとなつて力と力でぶつかってしまう。

ぶつかつて、流れが止まれば、向こうの勝ちだ。

というのは、わかっているのに。

どんどんどんどん時間が浪費される。

サブのメンバーも心臓を掴まれるような思いをしながら、汗を噴き出させ体温とテンションをカチ上げる。

あいかわらずピッチでは元気な9番が躍動し、それめがけて奪ったボールをロングキック。もちろん簡単には拾えず結局ミラクルズボールになるのだが、いちいちラインを押し下げられて疲れる、凹む。

『なにをやっているんだ、上町大地は』

『まさかこのまま終わるのか？』

『ピッチもピッチだ、やり方を工夫しろ！』

『可憐お前それでも代表か！』

『無理攻めしろよナナ！』

『キャプテンおとなしすぎるぞ、もつとリーダーシップを見せろ！』

『奇跡を起こしてくれ、ありす！』

『……諦めよりは、批判や憤怒の方が、百倍いいよね』

クソ落ち着きに落ち着き払った大地が、まるで他人事のように思った。

なぜなら僕にはもうやることは……タイミングを見計らうこと、ただだから。

衝突が起きた。

両軍入り乱れて揉み合いかける。大袈裟に痛がり転がる相手選手、急かせるこちら。時計が止まって手当が入って……

キャプテンがこちらを見た。
頷いた。
唇を噛み締めて、頷き返す。

時間が、消えてゆく。
残り一分。アディショナルタイム、ロスタイムボードが出た。
三分。

「……蘭！」
「……」

返事もせず、しかし恐ろしい勢いですつ飛んできた。両手でその両頬を包み込む。
ボールをだいじに抱えるように。一言だけ。

「……みんなを、守ってくれ」
「……」

ゆつくりとしかし力強く、頷く。

いつものように「応!」という威勢のいいよく通る返事はない。だがしかしそれこそが……心強い。

「3番!? 蘭!？」

「なんで今からデیفエンダー入れるんだ!」

「気でも狂ったか、コーチ!」

口々に喚き散らすサポーターの間で、少年が、麻生亮太が反論する。

「いやきつと、蘭さんは……ピンチシューターだよ!」

「はあ!」「」

不穏な単語に疑問と不審の渦まで加わる。哲哉は叫ぶ。

「なんでもいいからゴールコオオオオール!! 交代選手を勇気づけるぞ! じっくりぞお!!」

テンマのゴールが見たーいー！ 見たーいー！ 見たーいー！ ……

もはや節もなく歌ではなく絶叫であり懇願であり祈りであつた。でもそれで、みんなの心がまとまっていく。

プレーが切れない。時間は容赦なく過ぎていく、九〇分を超えて、ロスタイムに入る。

ありす、がむしやらかな突進で切り崩そうとする、潰される、無様、でも脚でボールを掻き出す、それを拾うは……流乃。

こんな時でも落ち着いてるのが流乃のいいところ悪いところ。

行つてまえクロスを上げるのではなく相手サイドバックを見据え……その右脚に当てる、出した。

コーナーキック。

笛が鳴つてユミ姉が猛ダッシュで引つ込む、蘭がその倍の勢いでピッチに入る、ナナがそれを見ながら時間を使いすぎずしかし準備は整うタイミングで、コーナー

に辿り着いた。

キャプテンを見る、頷いた。

本人を見る。キャプテンよりまだ遠く、はるかかなたに佇む彼女は、真正面を見据えて仁王立ち、微動だにしない。

だがそれこそさっきの大地同様、頼もしい。

短い助走を取った。

「……頼むでえ!!」

吼えながら、蹴った。この方が、余分な力が抜けていい。

ボールは高く速く、ゴールから遥か遠い自陣めがけて飛び、敵陣の意表を突き度肝を抜いた。

そして急角度で、落ちる。

そこへ走り込む大柄なネコ科の猛獣、これぞ3番。

呆れ返るほど高く跳んで、身体を二つ折りにして、その額を、空から降ってきた

獲物に、ブチ・当てる。

そこに居た全員が軌道を見失うほど圧倒的なパワー・ボールが、ゴールネットを直撃する。GKは、反応もできない。

今度はこちらの歓喜が、爆発した。

地獄の底から1秒後には、パラダイス。

雄叫びを上げるもの、拳を振るもの、誰かれ構わず抱きつき抱き締めるもの。観客席は「お祭り騒ぎ」などという言葉では言い表せないようなカオスの極み。

ピッチはそうはいかない。

誰よりもそのシュートを決めた蘭がボール回収に恐ろしい勢いで駆けると、既に可憐がそれを小脇に抱えて戻るところだった。

目を合わせると、ニツと笑う狐。

「ランッ！」

ナナが叫ぶ。

「……」

小さなうなずきを返す。

キャプテンはそれを見て思う。

まだ、中にたまっている。

それを逃さないように、口一つ、きかないんだ。

いつもならまさに山をも動かす咆哮で、相手を威嚇する蘭ちゃんなのに。

コーチを見ると……

うわあ、背中向けてベンチに座る————！

「……よし勝った」

「な、な、な、何を言ってるんですかコーチ、ままま、まだ同点ですよ同点、いつなんどき、相手だつて、一発で、」

「いや。」

あとは、美緒が適当にやつてくれる」

「ままま、またそんな、また」

興奮のあまりどもる古都はしかし、そのクソ余裕と悪戯っぽい笑みが浮かんでいるのに、「本当だ」と思った。

物事には、「流れ」がある。

ゲームはだいたい、流れの奪い合いである。多少力の差があっても流れを掴んで離さなければ勝てるし、流れを失ったままではなかなか、勝ち切れない。

いままさに大地の入れた「スイッチ」で、流れがこちらに来了。

そして「またか」が向こうに行つた。

もちろん、もう一度跳ね返せばいいのだが、残念ながら……もちろんこちらには好都合なことに……ミラクルズはこればかり延々やつてきたチームでありスイッチのオン・オフに嫌というほど慣れており、相手は逆に、スイッチが入らないように、もしくはスイッチの存在を無視することで、ここまで来たチームである。

お話にならない。

時間が進む、もう無い。

とりあえず延長にもつれ込ませろ、ドサクサはやバイ、とベッタ引きで人壁ディフェンスの敵陣、そのおかげでマークが外れ、自由ができる。

今度はエレーナが中央をドリブルで駆け上がり……思い切りのいいミドルシュ-

ト！

それは弾かれる、不運、

しかしそこに飛び込む21番、ありす、なんと幸運、

自分で撃つ、と見せかけて中央にグラウンダー・パス、わずかなスペースに走り込む、エース・ストライカー。

可憐がその必殺のシュートを撃ち放つ。

だが不運、気迫溢れる相手GKが一か八かで跳んだ、その両手へ吸い込まれ……いや、だが幸運、キャッチはされずに弾かれる。

ボール天高く舞い上がって、ゴール裏に消える。

コーナーキック。

ナナ、今度はゆつくりと時間を使って歩む、おそろくラスト・ワンプレー。

キャプテンを見る。

キャプテン、ひとつ思いつく。が、それをどう表現していいものやら。自分を指差すとバレルし……

顔を、『まかせて』の顔にした。

ナナが、『まかせた』の顔をした。

センターサークルちよい前に、陣取る。

「エレ！ 蘭！

……勝負!!」

その声に二人はぱあつと顔を明るくし……美緒を追い越して、自陣へ戻る。左右にスタンバる。左にエレーナ、右に蘭。

「人間は、見たいものしか見ない」

これが上町大地の人間観察の永遠のテーマであり、それを逆手に取ったり推し進めたりして、細かい戦術を組み立てていく。

蘭がゴールからまたはるかに遠ざかったことによつて、「あれはない」と敵陣誰もか、思った。

思いたかった。

だつてもう一回あんなもの撃たれたら、どうしようもないから。

その、アメフトのQBの後ろに二人のRBが並ぶような姿を見て、ミラクルズ陣は思わず噴いた。

ゲラのありすなど、顔を地面に向けて笑いをこらえる。笑ってる場合ではない、ではないんだけど……

ナナが今度もまた、精度優先の短めの助走を取った。ゴール前では囧と割り切った胡桃やももが、囧とバレバレの過剰に派手な動きで相手DFに捕まえられてるふりをして、捕まえている。

蹴った。

ボールは今度は優しい軌道を描いて、スポリ、とキャプテンの足元に、収まった。腕組みをして右足をその上に乗せる。

敵陣は、なにがどうなってるのか理解不能で、固まった。

いや固まっている場合ではない、あれを回収しなければ……いや、あそこでああやって持たれているなら笛が鳴って……

千々に乱れる気持ちのゆらぎが、足を止め傍観させる。

誰も来ない、のを確認してその前のスペースに、

ぼーん

と蹴った。

美緒を追い越し、エレーナと蘭が突進する。

ハッ、と我に返った時はもう遅い、白熊とライオンが、そのひとつの獲物を奪い合う。

勝ったのは、もちろん、雌獅子。

タメてタメてタメてタメた、一週間分の力を、爆発させた。

ロングシュートなんて生易しいものではない、地を這い標的を灼き尽くすその姿まさに、長距離巡航ミサイル・トマホーク。

真つ直ぐ突き進んだ投斧は、行き掛けの駄賃にGKの手を弾き飛ばして、ゴールに突き刺さった。

づいたサポーター達が、声を上げる。それはすぐに、コールになる。

ダイチ！ ウエマチー……ダイチ！ ウエマチー……ダイチ！ ウエマチー……

本当にくすぐったさを感じながら手を首を横に振った。ピッチを指す。ワーツ、と拍手に変わった。

心重いが、やらねばならぬ。壮年男性の体裁構わず両拳で顔を拭って号泣する相手監督に、握手を求めた。言葉にならない。相手もこちらも。すぐに選手たちに取り囲まれて、涙の輪ができる。きつとこの濃い情があれば、また立ち上がるのだろう。

見ればピッチで、歓喜の押しくら鰻頭の横でひとり、ピンクの選手が緑の選手ひとりひとりに声を掛けている。

美緒だ。

まかせてあんしん一〇〇％。

まあちよつと、頼り過ぎかな。

「……コーチ！ コーチ、コーチ、コーチ……胴上げ……！」

「わーーーーー！」

「待つて待つて待つて、今日は、待つて」

「今日せずにいつするんですか！」

「次ですか！」

「いや……」

優勝、した時」

「わはははははははははは……」

悪質な冗談に、バカ笑いが出た。

またそんな、恥ずかしいからって、そんな。

「じゃ代わりに……」

「こつとん」

「ええっ!？」

「それだ！ さすがコーチ！ それ……!!」

「わーーーーーっ」

「あ、あ、あー……」

わっしょい、わっしょい……

目をぱちくりさせてツタンカーメン（の棺）のように固まった古都の身体が、何度何度も宙を舞った。サポはゲラゲラ笑って、それを見た。彼等にも挨拶に、いかねばならぬ。

みんな一線に揃って、キャプテンもコーチもマネージャーも一列に並んで、手を繋ぎあつて、それを上げて、下げて、お辞儀をした。温かい拍手が鳴り止まない。涙で顔くしゃくしゃの千里が、蘭を掴まえる。

「先輩！今日はあつしがやります！肩車！」

「ああつ、いいよいいよ、今日はだつて、みんなで……」

「いやあやらせてくださいお願いしやす!! では!!」

「あ、あ……」

「ん、ん……んー!」

重さ大きさもさることながら、興奮の極みで身体がふわふわして、力が入らない。肩車って……どうやんだつけ？

と、背中をぽんと叩かれた。頭を抜いて振り返る、笑う、まかせる。

「……よつ、と」

「わ……ああっ!？」

さすが男の人だ。軽やかに上がった。

我らがコーチ・上町大地に肩車された我らがWOM・天満蘭を見て、また、客席が沸いた。

「コ、コーチ、降ろして、降ろして、恥ずかしいよ」

「いやいや、ほら、サポーターに手、振って」

「だって！」

「ほら、コール」

テンマ！ ラーン！ テンマ！ ラーン！

テンマ！ ラーン！ テンマ！ ラーン！

やむを得ず頬を痛いほど赤くして、泣き笑いながら両手をぶんぶん振った。またそれで、盛り上がる。

ワーツ……

「豊！ な、なんだあの、あの優男は！」

「し、知らないよ僕だつて！」

父と兄の顔もまた、ぐしゃぐしゃだった。そうすると、よく似ていた。三人とも。

♪ 蘭ちゃんのゴールが見たーいー 見たーいー 見たーいー

蘭ちゃんのゴールが見たーいー

燃えろて・ん・ま 蘭ー

歌声は、止まなかった。

次々に名前を換えて、まだこの先のゴールを求める歌が、スタジアムに響き続けた。

■宴

——祝勝会は、なごやかに。

場所はいつものおいしいラーメン『山嵐』、貸切で厨房には大将と並んで、『タベルナ』のシェフも居る。

「今日ホント凄かったですよ。大感動。店閉めて超正解」

「キューツ……ミスったなあ……いやあ、料理人たるもの己の欲望ばかり優先しちゃあ……」

「料理人が己の欲望に正直でなくてどうするんですか」

「キュー……」

笑顔で会話を交わしつつ、二人の手は止まらない。食卓に続々と、シェフ自慢のイタリアンと、大将が心を込めたお惣菜が並びゆく。

「それでは！ 予選突破を記念して！ コーチからいつもどおり簡単なご挨拶！」

「「あはははは……」」

「ははっ、じゃ……」

えー……」

見渡す笑顔は、今宵はチームメイトと、チームを支え続けた空堀、駒川、千林、高安の男性陣だけ。

また家族友人含めた派手なのは……全部「終わって」から、という三十六の提案。この@ホームが、心地良い。

「みなさん。

おめでとう。

それから……

ありがとう。

乾杯！」

「「かんぱあああああい!!」」

それ以上一言も必要ない。賑やかないつもの宴席が始まった。

「……エレちゃんエレちゃん！

あれ、最後譲ったの？」

「とんでもありません！」

ももが誰しもが思った疑問を訊いた。エレは唐揚げをほうばりながらぶんぶん頭を振った。

「わたし、これは、わたしが撃つていいんだろうか、でもどう考えても蘭姉様が撃つべきですし、もし撃つちゃったらまた『漢字読めるけど空気読めない残念ハーフ』って言われると思いマシて」

エレらしくもないジョークに場が沸いた。

「まして外したりしたらもうどうなることかと……そんなこと考えてましたら全然心配なくて、普通に抜かれて普通に撃つてくださいます。ホッとしました」

「なんとかの馬鹿力ってヤツだ！」

「せやから火事場は隠さんでええねん」

千里にツツコむナナ。

「そこまで考えて『アレ』をやるなんて凄いですね、キャプテン！」

「それがね、ちよつと聞いてみんな。」

同点追いついたでしょ？ 次どんな方向で行くんだ、って思うじゃない。時間つぶして延長に持ち込んでもいいわけだし、向こうが必死のカウンターしてきたら怖いから守備先でもいいわけだし。

で、見たらこの人背中向けてベンチにスタスタ帰ってるの！

なんだこの人って思った！」

ほとんど冠婚葬祭などイベントで動かないお父さんをなじるお母さんである。

「いや、だって、ウチなんだから次１点獲りに行くに決まってるじゃないか。言うまでもないだろそんなこと」

「獲り方あるじゃない！」

「蘭に決まってるだろそんなもの。」

あの状態で他の誰使うのさ、わかってるくせに」

「だって」

「それより、ちよつと聞いてよみんな。」

この人あのナナからのクロス入ったらバンッって足で止めて、それはいいんだけどこうやって腕組んでき！

なにやってんだこの人って思った」

これにはみんな爆笑せざるを得ない。

極限の緊迫では普通に見えたことも、冷静に見ればものつすぐくケツタイなことがある。

「だつ、だつてあんなことやりますよって口で言うわけにいかないし、けど蘭ちゃんエレちゃんには伝えないといけないし」

「その前に『勝負』って言われマシたからわかってマシたよ？」

「エレ・ちゃん！」

「しかもキャプテン容赦無いんだー。コーチのボールより全然速くて、ボク、必死で走ったよ！」

「蘭・ちゃん！」

わははははは……

「いやでも、あれはさすがだった。

僕があそこにも、あんなことできるとはとても思えないよ」

「も、もーっ……

褒めてるんだか貶してるんだか……」

愛しているのである。

「……勝負の結果にはちゃんと理由があつて」

大地、笑いながら言葉を継いだ。

「エレは九〇分走ってるんだから。そりや入りたての蘭がどうやったって勝つよ」
「でも、ああいうフォーメーション見せられたら、『二択』って思うわよね……」

「そう。」

しかも、『3番には撃つて欲しくない』ってバイアスも掛かるんだ。これもまた反応を鈍らせる」

「あの凄まじいヘディング食らってますもんね！」

あつ、コーチ！　そう！　あれ、あそこで蘭先輩って、やつぱりピンチシューターですか！」

「まあ、そうかな。」

別に変わったことやったわけじゃなくて、相手はセットプレーの時マークきっちり決めてきてたので、一人高いの突っ込めば一人余る。それだけ」

「それだったら一五分前でもいいーじゃない！」

はなこの正論に、

「いや。あれは、一発で決めないと。」

終盤のあのドサクサだから、あいつだれかマーク行け、っていうのも気が回らないんだ」

「……負けた時と同じ、だな」

忍の眼が鋭くなった。

「そう。」

敗戦から学ぶものは多い」

「それにしてもあの時間は無いわー」

「そうね。」

……私交代ボード見た時実は足攣りかけてて」

はなこの嘆息にユミ姉が加担。

「凄いダツシュで帰ってきたじゃないですか！」

「タッチラインでその場でへたり込んでたの知らないでしょ。誰も相手してくれないから寂しく独りつま先伸ばして」

「すつ、すいません!!」

マネージャーが謝ると、

「いーのよ。戦場で負傷して見捨てられる兵士の気分が味わえたから」

「わーん、ユミ姉さーん！」

「ううんこつとん、悪いのは全部指揮官」

「えっ、僕？」

「だからさつきからそう言ってるじゃない！」

あははははは……

……と、いうのは全て後付けの理屈、いま考えた口からでまかせ。まさか指揮官が

「今日は蘭だと思ってました、根拠は勘」

「タイミング見計らってたら時間どんどん無くなつて結構焦ってました」とは言えない。

嘘も方便。

お母さんだけがその嘘っぱちを見抜いて叱っているのである、正直になりなさい、と。

まあしかし男の子と言うのは、いつでも、いくつでも、格好をつけたいものである。

「……まあしかしでも、ホッとしました」

「正直な感想だね。」

「どうですか監督、いまのお気持ちは！」

大地が頬を弛ませて、高安がインタビュー。

「いやあ……今日負けたらほんと切腹ものでした。みんなにありがとうと伝えたいです」

「キャプテン、監督はこうおっしゃってますが！」

「はい、私たちもありがとうを言いたいです。」

ですがそれはもう終わったこと。

いま我々は既に次の試合のことを考えています。

次の試合でこそ、我々の真価が問われると思います」

「なんで通訳入っとなねん」

「次は司令塔、ヴェテランの難波選手です！ 難波さん！」

「今日はオフエンスが1点も獲れずに申し訳なかったですね。本戦までにタフに練習して、個の力を強め、連携の精度を上げていきます」

「マスコミ対応だー！」

「ディフェンスリーダー、梅田選手！」

「ひゃー、ポロツと取られてごめんなさい。次からしっかり守ります。

でも今日は！ コーチの！ 魔法に！ 助けて貰いました！ もう最高！」

「そうですね、観ていまでも思いました！」

コーチ、次も『上町マジック』の炸裂に期待してます！」

振られた大地、笑う。

「あはは、そうだね。

次を勝てたら、まあ、僕の価値がすこしはあつた、つてことになるのかなあ」

「勝ちますよ！ コーチのために！ 約束します！」

「ちーはホンマお調子やなあ。できるかどうかわかん約束はすなー」

「しかも試合になんの貢献もしてないセカンドGKのくせに」

「うがー！ー！！

してるもん！ 応援とか！ アップとか！」

ナナと可憐のイジリに顔を真っ赤にして暴れる千里。

「いや、でも、ベンチをチー坊がこうやって盛り上げてくれたのは本当だぞ。客席は俺達ができてみな。

ベンチには、吹田千里が必要だ！」

「ほら！ ほら千林先輩はわかつてる！ やっぱり応援団長は見識が違う！ 人徳が違う！ 哲哉最高！」

「そお？」

クスクス笑う流乃が、堪えきれず種明かし。

「ちー。あんたいま、『ベンチに必要』って言われたのよ」

「え？

……えー……」

爆笑が起きた。気づいた千里が、

「うがー……ー!!!」

「……いやいや、まあまあ、チーム誰ひとり欠けても成り立たない。それは本当で
いますよ。はい、これも追加ー!」

なにやら巨大な保冷バッグをいくつも運びこんでくる三十六。開けると段々にな
った大寿司桶が現れた。

「これ、いま人気沸騰中の超旨い回転寿司『金沢魚菜』の特選にぎりー!」

「わーっ」

「……お二人にも」

「おーこれが噂の」

「最近食べ歩き行く時間無くてさ」

「いかんよな、研究は大事だ……どれ」

「ん。イける」

「……いまは回転寿司でこんなもん出すのか。まいったな」

「……それからこちらはのちほどデザート用に。こちらはもちろんみなさんおなじみ、」

「えすぽわー……あ？」

「イエス！ ももちろん大正解！」

「わー……っ!!」

ケースに丁寧に入れられたケーキにタルトにパイにプリンにゼリーに……それはまさにジュエリーボックス。洋菓子『エスポワール』は全国からセレブがわざわざやってくる名店中の名店。

「……お二人も。もうお食事に」

「いやいや、なんか刺激されたぞ。どうすべ……やっぱ麺で勝負か！」

「僕もジェラートは持ってきたんだ。ちよつと何か小綺麗に組み立てるよ」

まあこうやってゆるんでくると、だいたい、一番ゆるいところから、ネジが落ちる。

「ああ……このネタの薄いお寿司こそ、私たちのパワー・フードです」

「ん？ はっばやったら、こんな庶民の食べもん、食べたこと無いんちゃうん？」

「いえいえ、この間、一年生みんなで行きまして」

「あ!!」

「へー、ええなあ」

「おなかいーっぱいいただきまして、必勝を祈願したのです」

ん？

「千林先輩も来られまして、」

「あつ、いや、あの」

「哲哉先輩、もう明日葉は無理だ。いつも無理だけど。」

「いやあ……あの、抜け駆けるわけじゃなかったんですけど、一年だけでこうガーッと盛り上がるう、って企画があつてですね」

可憐がバツの悪い顔で。千里。

「『去年を知らない我々だからこそ、思い切ったプレーができる。これでチームの危機を乗り切ろう!』という感じで……」

「その場が、『金沢魚菜』さんだったんです」

あります。美緒が優しく（聞こえる口調で）問う。

「いっぱい食べた？」

「ハイ、凄かったデスよ、お皿がこーんなに重なったTowerがいくつもいくつも、全然収まらなくて、隣のテーブルに……」

「最後は板長さんと職人さんが三人がかりでつきつきりで注文を捌いてくださいましたー。とても贅沢な時間でしたー」

「いやいや、えーつと……また行きましょう！ みんなで！ みんなで！」

千林の声に、顔を見合わせたのは三年生。

「……実はね。私たちも似たようなことを。それも」

「えすぼわー、なの！」

「たくさん食べた。たくさん……」

「これがねこれがねいつもみたく一般バイキングじゃなくてスペシャル食べ放題でことδειいつものケーキバイクじや見たこともないような豪華でリッチなスイーツが並んでて」

「マンゴータルト……あんなマンゴー、アタシいままで食べたことないヨ」

「実はそれで僕も御相伴に預かつちゃつて。スイーツ男子になつちゃつた。」

あ、今度また、企画するよ、僕が！」

高安が恥ずかしそうに白状した。

と、いうことは……ほとんどその場の全員が、美緒を見た。二年は国会答弁を委任し、一三年は野党議員気分。

脳内ソロバンをぱちぱちと弾いて、美緒。

「……はい、私たちも、やりました！」

上町邸のお庭で、二年生だけで、栄養満点・ホルモン焼肉パーティーを！」

きたーっ「嘘はついてない」戦術ーっ。

いつだつてぼくたちは、たいせつなことほど聞かされていない。

「な、なーんだみんなやらかしてんですね、ちよつとホツとしました、ちよつと罪悪感あつて」

「はは、私たちもいいのかなー、とは思つたんだけど、甘い誘惑には勝てなかったわ」

「姉さん上手い！」

ふと、匠は思つた。なぜ二年男子が綺麗にバラけてるのか。

「……僕、二年に呼ばれたんだけど哲君は一年に呼ばれたの？」

「え？　なんで？」

「いやだつて二年に呼んでも……あ、事情があるつて言つてたっけ」

「ジジョー？　うにゃ、俺は三十六に呼ばれて鮎食えるつてノコノコ行っただけで」

「……高君は？　誰に呼ばれた？」

「カラちゃんだよ」

「……」

「「空堀三十六!!!」」

そこに奴の姿は既に無い。
奴だけが三宴会とも……

「ま、まあまあ、みんな。三十六は影のWOM、じゃないな、MVPなんだから。企画者で幹事なんだし、まあ、そのぐらいはいいじゃないか」

「いや、それはいーんですけどだって、コーチ、コーチ二年生とこだけでしょ？そのポジションに居るべきはコーチじゃないかなあ！」

「そうね」

「いやいや、いいいいいよ、ほら、うーんと、僕が居ない方が弾む話もあるだろうし」

「そんなのいつもやってる。」

居た方が弾む話が、稀にある」

「ダネ」

「いや……えー……

いや！ 本当に！ 僕は焼肉で大満足だったから！ 気が遠くなるほど美味しい『熟成肉』 っていうのを、こーんな塊を美緒が七輪でじーっくり焼きあげてくれて……」

えっ？

いま、耳慣れない単語が？

までも全員が、美緒を見た。

キャプテン立ち上がる。

右拳を突き上げ左拳を腰に当て、叫ぶ。

「さあみんな！ 食べよう！

今日はこれ、お米一粒たりとも！

ソース一滴たりとも！

残さないよ!!」

数秒、立ち止まって、

仕方ないなあ、と肩をすくめて、
みんなで声を揃えて、

「「はいっ!!」」

笑った。

そこかしこで手当たり次第に盛り上げられた取り皿が見受けられ、箸がフォークがナイフがスプーンが舞う。見る間に空いていく皿を引いては、汗だくのシェフ二人が山盛りの「食いもん」を持つてくる。

とにかくきょうは、腹が減った。

戦ったし、走ったし、叫んだし、泣いたし、笑ったし、それから、胸のつかえが、降りたし。

「蘭先輩、ピザ一枚勝負!」

「ダメダメ千里、こんなところで脚使ったら、ブラックホールに置いてかれるよ」

「あれは生命体ですらない宇宙現象だから除外です! 蘭先輩さえ倒せば……オレ

が、海賊王だ！」

「しょうがないなあ。ジュースはありだよな？　タバスコは？」

「アリアルールで！」

今日は勝つ！　早食いは、体格ではないことを、思い知らせてやるッ！」

「来い！　飲み食いは……POWWWWWWEEEEEEEEERRRR!!」

「レディ……ファイッ！」

負けても負けても挑むのが、千里のいいところ。

勝負から絶対逃げないのが、蘭のいいところ。

狂いや饗宴は、いつ果てるともなく。

S

——豊が家に帰ると、リビングが明るいまま、TVには先日蘭と観た番組がポー

ズされていた。不思議に思えばガラスの向こう、寒空に蘭が居る。

まあなんと、これからエアロビクスでもやるのかというへそ出しのセパレーツ・スパッツ姿で、父の組んだ高鉄棒で懸垂を繰り返している。湯気を、オーラのよう
に身にまといつて。

「……らーん。元気だなあ」

「あ、お兄ちゃん！ おかえりー！」

腕は筋肉は、休めない。

「祝勝会は？ 早く終わったの？」

「食べ物無くなっちゃって、みんなウトウトしだして！」

「あはは。興奮の大バトルだったね！」

「うん！」

「蘭、カッコ良かったよ」

「エヘヘヘ……」

お兄ちゃんは？ お父さんは？」

「父さんが学生の頃から行ってる立ち呑み屋さんに連れてってもらった。おでんとモツ煮込みと串カツ」

「ああいいなあ〜！ 今度連れてって！」

「うん。」

で、母さんと交代。今度はよくデートしたバーだつて」

「早くオトナになりたいな！」

「ははっ」

その隆々たる鋼の身体はもう……背筋なんかほら……腹筋もほれ……

いやあ、言うのと傷つくかな？

喜ぶかな？

「……ほどほどにしなよ。いまは気が張ってるから、無理しちゃうぞ」

「わかつてるよ！ でもこのままじゃたぶん眠れない！ もうちょつと疲れる！」

「はは……じゃあ、僕は上がるね。風呂入って寝る」

「うん！ おやすみー！」

お兄ちゃん今日ありがとーう！」

「それは僕のセリフ」

立ち去りかけて、ふと、踵を返す。

「……あそうだ、蘭。あれは、蘭は『ストライカー』っていうの？ 最後に出てきて決めたの。お兄ちゃん、サッカー全然わからなくて」

「ううん」

よつ、と地に足を着けた。

振り返って、断言する。

「ボクは『デیفエンダー』！」

みんなを守る、最後の砦！」

みずからの誇り高きその宣言が、勇氣と希望を膨らませる。
胸いっぱい。

漲ル勇氣 溢レル希望
ソノ体軀 巨キク勁ク

手斧振ル 敵ノ頭破ルニ非ズ
瓦礫碎キテ 仲間ヲ救フ

時ニ止ム ソハ休息ニ非ズ
力ノ圧縮 想ヒノ凝縮

解キ放テソノ力 今ガソノ時守ル時
天真爛漫 天満蘭

Never GiveUp, Go Ahead, and DO MIRACLES!
Miracles! Episode 3
ディフェンダー！

ミラクルズ・フォーメーション変遷図
(クイーンズカップ・地方予選)

SemiFinal

Start 4-4-2 "Double Diamond"



Reserve

GK20千里 DF2はなこ MF16由美子 MF19マキ FW11愛

3rd-place PlayOff

1

Start 4-4-2 orthodox



Reserve

GK20千里 DF2はなこ DF3蘭 MF19マキ FW11愛

2

91min 4-4-2 "Defender"



Reserve

GK20千里 DF2はなこ MF19マキ FW11愛

OUT

MF16由美子

■あとがき

ありがとうございます、ながたかずひさです。
お楽しみいただけましたでしょうか。

蘭吉つつあんのお話、いかがでしたか。
ティフエンダーは何よりもずい！ですよ！
てなもんで大ちゃんもCB片方にはいつも蘭を重宝しているのです。

蘭といえばチームーのナイスバティですが、
そこんとこもうちょっとサービスできたらよかったですね。
このへん絵があるマンガとかアニメとか羨ましいです。
まあ、お兄ちゃん気分で膝枕などご想像ください。

本編にも書きましたが、米軍帰還兵の自殺者が戦死者を超えている
と知り言葉を失いました。
もちろんイラク市民には10万を超える犠牲があり……
戦争に勝者も敗者もありませんよ、虐げられた弱者がいるだけです。

さて、なんのかの言うて残りヒロイン5！（リメイク待ち3）
もちろんここからクイーンズカップ本戦で大盛り上がり……
だと思います？ さあどうかな？（笑）
またよろしければ、読んでやってください。

あなたに良い縁起が訪れますことを。

■おくづけ

書名 Miracles! Episode 3 ティフエンダー！

作者 ながたかずひさ

発行 サークル PowerNetwork!!

発行日 2013年8月11日

Web <http://rakken.net/>

twitterID KazuhisaNagata

Mail nagata@mti.biglobe.ne.jp



**Miracles! Episode 3 (#13) - Defender! -
Powered by Kazuhisa Nagata**